
鋼鉄の暴虐～パラサイトフリート～

TK-M型

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鋼鉄の暴虐〜パラサイトフリート〜

【Nコード】

N2405E

【作者名】

TK-M型

【あらすじ】

時は大戦後期。解放軍織滅作戦「エーヴィツヒグランツ」によって滅亡の淵に立たされた解放軍は、起死回生を狙い最後の大攻勢「ホーリーグレイル」を発動。激戦の末、遂に解放軍艦隊は帝国軍の最深部まで突き進んだ。しかし、無情にも彼らの眼前で絶望の摩天楼が生まれんとしている。増援を急ぐ同志たち。その中には解放軍最強の「超兵器殺し」も含まれていた…。最後の決戦から数年。新たな暴力が動き出す。世界観はKOEI発売のゲーム「鋼鉄の咆哮2」より。進めば進むほど関係がなくなっていくエセ・ファンフ

イクシヨーン！

第0話 最終決戦（前書き）

KOEI発売の「鋼鉄の咆哮2〜ウォーシップガンナー」のファンフィクションです。プロローグではゲームのラスボスから始まりま
す。（以下ネタバレ）超兵器の光に飲み込まれた彼らはどうなった
のか？その後の世界はどうなるのか？そんな後日談をベースに架空
戦記をコケにしたものが書いたら良いな、と考えています。色気を
期待せずごゆるりとどうぞ。

第0話 最終決戦

鋼鉄の暴虐

0 最終決戦

薄暗い廊下が続いている。

一切の生命も感じさせないそこは、暗くて細長い。

壁は一面物言わぬ金属で覆われて、鈍い光沢を放つ。

所々に配置された計器、モニター、コンソールにかすかな光が明滅して、この廊下が確かに生きていることを示していた。

天井に無数に走るパイプが、まるで怪物の血管のように不気味な唸りを発する。

そんな壁の一角にはトマトのような赤い、丸いガラスのランプが機材の一つにへばりついている。

静かだった。静か過ぎるほどに。

ヴイー！ ヴイー！ ヴイー！…

「全艦戦闘配置！敵超兵器の起動を確認！対艦戦闘用意！繰り返す……」

赤い警告灯は艦内から静寂を奪い去った。

ラプテフ海 帝国軍エーヴィツヒグランツ司令部「Trum von Babel」沿岸 13:30

大気は今にも爆発せんばかりに帯電していた。

昼のほずであるのに空の色は暗雲で塗りつぶされて薄暗い。

海原はどこまでもどす黒く、光は見えなかった。

まるで空間そのものが獣の体内であるかのごとく、帯電した空気は絶え間なく不気味なうなりを挙げ続ける。

それは耳で感じ取れる物でなかったが、その場にいる全ての生命を根底から揺り動かしていた。

暗い海面に、更に暗い影が滑り込む。

その禍々しい空気は、海上にある影の主に集約されているのだ。た。

その大きさを現実を既に乖離している。

先が見えぬ程の全長、それを感じさせないほどの空間を作り出す全幅、山を連想させる建造物。

何よりその圧倒的な存在感は、正対したものの全てを絶望させるに十分であるように思われた。

帝国軍超巨大戦艦「ヴォルケンクラッツァー」。

又の名を、究極超兵器。

全ての抵抗する力、主義、思想、意思までも粉碎するべく建造された怪物は、今、産声によって抵抗する者の死を宣言した。

と、それに答えるように水平線で無数の閃光が煌めく。それは花火のように儂い光のように見えた。

しかし、彼女の前から投射されたのは敵意の結晶に他ならなかった。

解放軍主力艦隊。

大和型、モンタナ型をはじめとする新型戦艦の群れは、今や自ら

の恐怖に打ち勝つべく、持てる火力を全て解放して砲撃を開始したのである。

敵意は、体の底から響くような風切り音とともに彼女の上空から降り注ぐ。

帯電した空気を突き破り、スパークを散らしながら砲弾の群れが襲いかかった。

空間が膨れ上がる音。

その場にいるものが聞き取れるとしたらそう表現する他無い。

ほとんど同時に着弾した大口径砲弾は、その周辺の海面を丸ごと水柱に換えてしまったようだった。

照準試射もなしの全艦隊による一斉砲撃である。

その威力は、海に存在する万物に存在の終焉を約束するのに十分だった。

少なくとも彼等はそう信じていた。

「やったか…!？」

誰が最初に波の音からそれを聞き分けただろう。

地鳴りともとれるうなりによってその信念はあっさりと裏切られる。

即席の嵐を抜けた彼女に、深刻な損害らしきものは見られなかった。

艦隊の見張員は、自らの周り空気が凍り付くのを感じた。

歴戦の彼は、自分たちが以前、己の無力をこつも具体的に示された苦い過去を思い出した。

帝国軍、大艦隊、超兵器……。

もう二度とあんな恐怖に屈しまい。出撃前に彼はそう「決めていた」。

ただ立ちすくむ彼等に彼女は静かに手を上げる。

艦首甲板が割れ、内部から「それ」は迫り上がって来た。

暗闇の中から、まるでその一部があふれ出した様な黒い、円筒形の塊は、鈍い金属音と共に怪物の艦首に固定された。

長さだけで重巡洋艦に匹敵する「それ」は、一見してその存在理由が判明する形態をしている。

すなわち、「砲」であった。

誰もが容易に判別し、しかしどれほどの威力を持つのかを予想するのに大きな困難を要する形と規模を持った「それ」は、真つすぐに解放軍艦隊に向けられている。

存在するだけで破壊神の化身としてのオーラを放ち続ける「それ」は、沈黙とともに獲物を見据えていた。

そして光が生まれた。

最初、それはかすかな空間の揺らぎにすぎなかった。

しかし、「それ」の先端から発した揺らぎは急速にエネルギーの

渦となり、ついには凝縮された塊となりつつあった。

次第に光は直視できぬほどの輝き始め、その見張員は目を細めて身構える。

…フッ。

前触れなく突然に光は消えた。

しかし、このときそれにつられて目を見開いてしまった彼は不幸だった。

一生の最後に感じるのが目の前に迫りくる圧倒的な「奔流」に対する恐怖、無力感、そして志半ばで消滅することの敗北感であることが不幸以外のなんである？

ここまで来たのに！

長年の悲願をついに実現する瀬戸際で、彼の思念は消えた。

くずおれることも、力つきることも許されず、四散して果てることすら叶わずに、ただ「消えてしまった」のである。

帯電した大気に木霊する「それ」。

「波動砲」の残響は、彼女から送られたただ一つの鎮魂歌のように、今や逆らうものがないかに見える海上に静かに広がっていった。

「解放軍第3、第5艦隊、通信途絶！電探反応消失しました！」
「ノイズ反応、極大化止まりました。しかし、中心部に依然として巨大な反応を確認！」

「間に合わなかったか…。」
ブリッジは絶望的な空気に包まれていた。目の前で合流を急いでいた解放軍の主力艦隊が突然にして消滅したのである。
本来、軍事的にも物理的にも信じられる事態ではない。
しかし、味方の艦隊を葬り去った主の一族と数多く渡り合ってきた彼らにとって、それは驚くに値しない出来事であった。

超兵器。彼女らの一族の名である。

未知に近いエネルギー機関で稼働する彼女らの強大さは、それのことごとく屠ってきた彼らが最も良く知るところだった。

しかしそれ故に、彼らは戦術的に敗北を表すこの状況に身を置いても尚引くつもりはなかった。

艦橋の中央に座す男がいた。

その男は泥沼の中のような空気の中でも、決して目を濁らせることがなかった。

ただ静かに、傍らの年上の士官に尋ねた。

「先任、後続の第9艦隊の到着予定時刻は？」

死地を前にしたとは思えない、自然で落ち着いた響きを持った声だった。

「ラプテフ海峡突破の戦闘を考えますと、早くとも2時間といったところででしょうか。」

「フム。海江田ならもう少し早く来られるとは思いますが、ここで彼らと徒党を組むまで待つとしても、勝算があがるとは思えんな。」

「ええ。むしろ一歩間違えれば被害は更に増すでしょう。それに…。」

先任仕官は言葉をとぎれさせて艦長を見る。

「…うむ。彼らにはまだやってもらわなければならぬことがある。彼らに付き合ってもらうことはない。」

「では…。」

男はゆっくりと、まるでこの絶望の空気を味わうかのように頷いた。

「…始めよう。」

それが合図だったのであろうか。

とたんに男を中心に全ての空気が吹き飛んだ。

「はつ。総員対艦戦闘用意！これより本艦は機動対艦戦に入る！」

「第一戦速！リアクター戦闘出力に上げい！」

「全兵装システム、スタンバイ！照準を目標、ヴォルケンク

ラツツアー」に固定！」

「速力51kt！」

「全兵装装填完了。各種センサーとデータリンクケージ構築。」

「主砲、有効射程まで距離1500。照準追尾開始。」

ものの数分とかわからず、艦は戦闘準備を整えた。

単艦とはいえ、幾重にも敷かれた帝国軍の防衛線をいとも簡単に突き破って彼らはここに至るのである。

特殊戦艦「熊襲」の能力と乗員の練度は、この戦艦を超兵器に匹敵するものとさせていたのだ。

かくして決戦は始まる。

「目標、有効射程に入ります。」

「主砲、超伝導ユニット出力最大で安定。いつでも行けます！」

「よし…。打ち方、始め！」

「てえっ！！！」

砲術長の号令と同時に、「熊襲」が持てる牙をついに剥いた瞬間である。

二時間後

解放軍第9艦隊旗艦「琉球」艦橋

「海江田司令。前衛艦が「熊襲」と合流しました。特殊戦艦「熊

襲」、依然健在です！」

「やつてくれたか。第13強偵艦隊が。九十九さんが、遂に…。」

海江田は一瞬体から力が抜けていくのを感じずにはいられなかった。それをなんとかこらえると、これからのことに考えを巡らせ始めた。

海江田の胸には、出撃前の「熊襲」艦長の言葉が未だに心に引っかかっていた。

しかしそれでも、またしても解放軍の危機を救った「熊襲」の一行に、彼は喜びとともに頼もしさを感じずにはいらなかった。

これで帝国の野望もいよいよ崩壊へと進み始めるだろう。

そうしたら、我々の役目も終わる。終わってしまふ…と。

安堵と寂寞の混ざり合った思考に海江田が沈んでいると、不意に通信の様子が変わったことを感じた。

目の前の地平線、丁度「熊襲」が超兵器と決着を付けた海域に不気味な光が揺らめき始める。

「…あの光何だ!？」

「ノイズが極大化しています!測定限界を突破!」

「戦艦「陸奥」、応答せよ!応答せよ!」

「戦艦「ネブラスカ」通信途絶!」

「司令、前衛艦との連絡が取れません!」

「くっ…。直ちに前衛艦との合流を急ぐ!全艦、最大戦速!第一

級戦闘配備！」

海江田の指令とともに艦隊は船足を早めるが、ノイズの極大化は止まらなかった。

やがて、視界は白色化していく。

解放軍艦隊を飲み込んだときのような、しかしそれよりも巨大な閃光の塊が現れる。

海江田の座乗する戦艦「琉球」も押し寄せる光とともに海底の底から響くような唸りにさらされる。

そしてこちらに向かって艦首を向けつつもその光に飲み込まれていくのは…。

「…「熊襲」。」

艦橋の窓よりの閃光と振動に耐え、それでも先を見据えようとしていた海江田は、その独特のシルエットに艦の名を呟く。

と、オペレーターより報告が入る。

「「熊襲」よりビーコンによるモールスを受信！」

「モールスだと！？内容は？」

「『再見カナウマデ壮健ナレ。後八任せタ。』です！」

通信オペレーターが言い終わる前に観測班が悲鳴に似た声を上げる。

「ノイズ極大域、「熊襲」現在地を突破！「熊襲」をロストしました！」

「なんと…。」

傍らの副長が思わず声を失う。

視線を目の前に戻してみれば、もうそこに「熊襲」の姿は見えなかった。

やがて光が消え去り、今度こそ本当に、目の前の海原には何も見えなくなった。

遙か向こうに雲海を突き破った日差しが見える。

それ以外は、何も…。

第0話 最終決戦（後書き）

ゲーム最終ステージを少ししい加減に再現してみました。ゲームをやられた方はお分かりかもしれませんが、ヴォルケンさんの前にわざわざ立ちふさがるとような解放軍の配置…どう考えても不自然ですよね（^^；）。

書き直すことも大分多いと思いますので、もしもよろしければ協力をお願いいたします。

ご感想、ご意見、ご指導、なんでもお待ちしております。よろしくおねがいします！

第1話 転戦命令（前書き）

ラスボス後、数年経過した後日談の導入です。まだまだ世界観がぼやけていますがそれは追々追加します（汗
元ネタの出所は気にしないでください。あの雰囲気が好きなんです
もの…

第1話 転戦命令

1 転戦命令

発：反帝国及び新世界秩序建設国家同盟 海軍艦隊総司令部
宛：第十三水上強行偵察艦隊 改メ同盟軍第十三遊撃艦隊

帝国暦64年、西文明太陽暦1945年 11月1日

『母港、第二管区旅順港へ帰投中の艦隊に通達。』

『長期遊撃体制にて、作戦目標である、南極海へ進撃せよ。』

『該海域に到着の後、帝国軍残存勢力と交戦、これを殲滅されたし。』

『帝国軍は超兵器「ブラッディカエサル」を中心として敵主力艦隊を再編。』

『大規模なる艦隊運動ノ可能性極めて高し。』

『現在、同盟軍第11遊撃艦隊急行中。』

『有力なれども敵旗艦の詳細不明につき増援の必要ありと認む。』

『尚、有力且つ機動力を有する艦隊は貴艦隊他に存在せず、更なる増援は不可能である。』

『貴艦隊の武運を祈る。』

『以上』

南太平洋沖 某海域

その世界を表現するのに必要な絵の具は「灰」のみであった。

逆巻く波頭を打ち上げる海原は紺碧の色を失って久しく、決して留まることはなかった。

が、海底はその上層の喧噪に比べて遙かに静寂で、かつ圧倒的な密度で空間を満たしている。

不動とも思える海底の明るい闇を、数瞬の間、本当の闇で覆い隠す影が動いていた。

影の主はポセイドンのうなり声宜しく低い水圧の波動を遙か水面から打ち下ろしている。

かつて人類が生み出した中で最も巨大、且つ遠方を目指すための脚として開発された建造物は、ここに至って恐竜的な進化を遂げつつあった。 基準排水量35万5千t。

戦艦と言う、人類にとって最も非生産的な形で現実化したそれは、事実反しておよそ現実離れた存在感を有していた。

安全で長期的に使用できる港の確保が難しいレジスタンスとしての軍隊機構を持っていた解放軍海軍が導き出した最終的な艦隊戦略が其れだった。

移動要塞。超兵器。

巨体を利用した新型の大出力機関。巨大な搭載能力。理不尽なまでの凶悪な攻撃力。

しかし、圧倒的なまでの力を持つ「彼女」の真の親は世界同盟ではなかった。

嘗ての世界を支配者であり、歴史の前に押し流されている国家「帝国」が彼女の故郷だったのである。

彼女は世界各地で悪逆の限りを尽くす「反乱分子」を一掃し、帝国臣民たちの前に新たな秩序と未来をもたらす守護神となるはずだった。

その決定打として、そして帝国の支配の象徴としてこの艦は三番目に進水したのである。

ところがこの栄光の「Trum」級巨大戦艦の姉たちは悲惨な運命を背負っていたと言えた。

一番艦「ヴォルケンクラッツァー」は反乱分子との戦闘により機関の暴走によって「消滅」。

竣工が遅れてドックでその余波を受けた二番艦「ルフトシューピゲルング」は半壊し、日の目を見ることなく葬り去られた。

しかし、姉たちに先立たれた不幸な戦乙女、三番艦「バベル」は、ここで安息を得ることは出来なかった。

彼女の建造されていたドックを持つ基地が、混乱に乗じた反乱分子たちによって一時的に占拠されたのである。

ドックで姉達の後を追うことを待つばかりだったはずの彼女は、その運命を大きく変えられることになるのである。

未曾有の巨大超兵器の拿捕の成功は、反乱分子 当時の解放軍に光明をもたらした。

もともと戦力的に劣勢な彼らにとって、この艦の有効な活用は勝利のを得る切り札になり得たのである。

艦装が未完成のまま放棄されていた彼女を完成させることは、大きな投資を必要とした。

それでも、解放軍首脳陣はその余りある包容力に移動しうる拠点としての価値を見出して、建造を再開させる決意を固めたのである。

前線拠点戦艦「邪馬台」としての彼女の戦いはこうして始まったのである。

それは生み出された目的と期待、その恩恵を受けるべき味方の全てに逆らう裏切りの途であった。

何も遮る物のない大海を波と共に風が彼を貫いていく。

まるで自分の全てが風と同化して霧散してしまうような気分にも

は浸っていた。

男の見つめる先の海は、どこまでも色を失った海原。

まるでモノクロの銀幕を現出させた様な風景を見つめる双眸は、海と同じくどこまでも深く、しかし淡い。

憂いの表情で眼前から吹き付ける強風に対する男の背後に、また一人の人影が近づいてくる。

「こちらでしたか、提督！」

吹き荒れる風の音に負けないよう、張り上げられて背中に打ち付けた言葉が彼の思考と感慨を中止させる。

「…角松か。君が来たということは…。」

ゆっくりと向き直った彼の顔には疑問は浮かんでいない。

「幕僚の招集が完了しました。会議の開始はいつでも可能です。」

「ありがとう。…なあ、角松。この海が元の『蒼』を取り戻すまで、一体どれ位かかるか知っているな。」

再び海原に目を向けて、男は問いかける。

「この戦争が終わったら…と申し上げたいところですが…。」

それを聞いた男は、どこか自嘲めいた苦笑を含んだ目を律儀にも答えた男に向けた。

過剰に発達した戦いに明け暮れた戦争の代償は、この惑星の海に致命的なまでの水質変化をもたらしていた。

原子レベルで変質した水は無害ではあったが、その色が澄んだ青に戻るには長い時間が必要とされていたのである。

「…考えたことは無いかね。人間が海から離れば、この海はきつとずっと早く本来の姿に戻るんじゃないか…とね。…では、行くか。」

向けられたどこまでも深く、淡い眼差しが呼びに来た男からの即答を封じた。

その間に提督と呼ばれた男は、もう一度海原にその目線を向けた。

その表情はまるで、想い人と分かれるような、名残惜しげなものだった。

そして「提督」は「角松」を伴って巨大な艦橋に相応しい側面デッキより「中」へ入るべく近くのハッチへと向かっていった。

そこは今もなお風を貫いて進み続ける、前線拠点戦艦「邪馬台」のものであった。

果ての無い波頭を粉碎しつつ直進する鋼鉄の女神。

灰色の海原を切り裂いて進む彼女は決して「独り」ではなかった。

彼女を取り巻くように海原を切り裂く刃が付き従う。

1つ…。

10…。

100…。

それよりも多く、幾ばくか小さい。しかし、力強い鋼鉄のナイトたちの群れ。

第13遊撃艦隊。彼女たちの家族はそう呼ばれていた。

この鋼鉄の軍団の内部では、その器に相応しい幾多の将兵が動いていた。

その規模はちょっとした都市のそれに匹敵する。

その中で最も大きな発言力と責任を両手に抱えたニダースばかりの人影が集まる一室がある。

彼らは浮かぬ顔に各々のスパイスを利かせて、花を咲かせるには暗すぎる論題に講じようとしていた。

『ブラックウイドウ』に続いて『血まみれの皇帝』…寄港もなしに超兵器戦のダブルヘッダーとは。超過勤務手当てを要求するどころではありませんな。」

少壮の将官がやくすんだ碧眼に誰に向けるでもない苦笑の色を浮かべてぼやいた。

巨大な楕円の会議デスクを囲むその部屋は、軍艦らしからぬ高い天井を持ったドーム状の空間を持っていた。

だが、どこと無く無機質な印象を受けるエメラルドグリーンの壁面は、そこが何かしらの軍事施設であることを物語っている。

彼らの目の前には、半透明なスクリーンが現出しており、彼らの悩みの種が映し出されている。

突然の転戦命令がまさにそれであった。

彼らは、北の帝国軍残党が建造しようとしていた超兵器を破壊してきたばかりなのである。

幸い建造中で本格的な戦闘にはならなかったものの、艦隊員に疲労が蓄積しないはずは無かった。

とはいえ、ぼやきの一言ぐらいを会議場でぶっても制裁の対象に

ならないのは、この艦隊の軍隊らしからざる顕著な一例ではあったが。

「我々は制約を受け入れて力を手に入れた「軍人」だからね。しかし、それでも労働者として、臨時給与なんかよりもいいかげん2、3日の休暇がほしいところだな。」

ぼやきに応えつつ、結局は同調して他方向にぼやきのため息を投げかけたのはその一座の最上^{カミ}の位置を占める人物であったが、その言動と同じくどこか抜けた感じがある。

そのどこまでも深く、しかし淡い色を放つ目はどこにあるうともあの灰色の海原を映し続けている。

最先任たる司令官がそんな感じだから艦隊そのものが作戦に乗り気でなかったことは想像に難くない。

「しかし閣下。差し当たって今作戦に投入できる状態にあるのも第十一艦隊と我々だけであることも確かです。それに……」

中年に片足を踏み入れようとしている二人の男に、対して既に両足を踏み込んだ男は言葉を継いだ。

「第十一艦隊だけでは、事態を収拾できませんまい……。」

この男にしては珍しく言葉を詰まらせた。

一瞬俯いて、男は沈黙を作った。

そして言葉を継ぐように、隣に座す者へ目配せで説明を促す。

それに頷くと、英国紳士を思わせる男は、席をより立ち上がって皆に正対した。

「戦力の現状は各々方もご存知の通りです。各方面基艦隊からの選りすぐりとはいえ、第11艦隊は編成されて日の浅い混成艦隊であり、戦力としての量は揃っていませんが、艦隊としての柔軟性に欠けるものと思われませぬ。

第12遊撃艦隊に至っては未だ編成中で、稼働戦力は既に第11艦隊に合流しております。当面戦力としての期待はできないことは明白です。

司令本部艦隊は健在ですが、先の「エーヴィツヒグランツ前哨戦」以来、外洋アレルギーといってもいい状態に陥ったままで、母港のインド洋周辺から離れようとしませぬ。

こんな状態で、もし今回の帝国軍の攻勢が本格的なものであれば、南半球の海はまた彼らのものとなる可能性があります。」

その場の全員がうなずいて同意を示した。

解放戦争（世界同盟　コーチン盟約機構による公式呼称）後期に帝国によって行われた大反抗作戦「エーヴィツヒグランツ」のため、盟約機構軍（以下、同盟軍）は一時的に軍首脳の殆どが拘束されるといふ憂き目に遭っていた。

その後、戦局の推移によって救出されたものの、同盟軍首脳には拭いようの無い傷を付けることとなった。

この打撃は、それ以後の戦局の好転に至っても司令部を母港のコーチン中央軍港から動かそうとはしなくなる要因を作っていたのである。

「あの作戦の勝利によって、同盟軍が開放のための反乱軍から、世界秩序維持のための防衛軍に意義を変えたこともあるがね。元々戦いによって現在の地位を得た我々は、使われるべくして使いまわされているのさ。誰も好き好んで戦場に行きたくは無い…。」

で、首席参謀。この指令を実行することは可能かね？」

全く司令官らしくない司令官は、自らの右手に座して現状の説明をなした将官に再度の発言を促す。

それに答えて、首席参謀つまり参謀長である村井忠志中将は報告を続ける。

「現段階でも十分作戦の遂行は可能です。念のため物資、燃料補給を途上のドウシ工島沖の艦隊基地に用意させます。補給艦は先行して、これを受け取ってから再度合流させれば万全といったところでしょう。」

「わかった。ただ隊員の疲労を考慮して本隊もどこかへ一時寄港させたいところだが、可能かな。」

「総司令部からの急行命令の手前、時間的には一日が限度でしょ

う。この艦隊が寄港できる島嶼基地群は進路上にはポリネシア島嶼基地群がありますので、そこを手配します。」

「頼む。ということだ。以上のとおりだ。任務終了して間もないところで、各員には悪いが、わが艦隊はこのまま南極大陸を目指す。作戦の詳細情報は寄港地、作戦直前に追って決定する。」

「情報部は作戦に必要な情報をとにかく集めてくれ。いかにせん情報が少なすぎる。ほかの各部署は通常艦隊運用シフトで良いが、長旅な上にこの先が大仕事だ。多少楽にやってくれ。何か質問、提案は？」

「提督。南極近海までの艦隊陣形ですが、相互援護型の密集体系にしてはどうでしょうか？通常シフトよりも各艦の連携が楽になります。」

「わかった。その点は副司令官に任せる。他には？」

「…では、各部署は後で運用方針を連絡してくれ。」

我が艦隊は、これより帝国軍殲滅作戦「アルマゲドン」第四フェーズの準備作戦を開始する。各員とも各々の準備を万全にして置いてくれ。」

ここで先ほどまで海原で風と戯れていた男は、その声のトーンを一つ下げて続ける。

並み居る参謀たちの目が、途端に鋭さを帯びたように見えた。

「なお、同時に今次大戦における我々にとっての最終作戦「V.F」も、いよいよ実行段階に移すこととなる。現在の我々のおかれた情

勢において、これ以上のチャンスは当面存在しないだろう。

急なことは言え、各員今更言うまでもないが、「覚悟」を固めておくように。以上だ。これにて会議を終了する。解散。」

皆は決然とした敬礼によってそれに答えた。

それは、鍛え抜かれた殺人機構が、再び本格稼働に戻ったことを告げている。

艦隊は新たな獲物へ向けて進撃を開始する。

そしてその中で動く艦隊員に、先程のけだるさは見る影もなかった。

第1話 転戦命令（後書き）

まだまだ船はおろか、キャラクターすらも詳細を明らかにしていません。出来ません（汗。といても思いついていないとかそんなことは無くただ、まだ夢見心地のような気分で読んでいただけるとありがたいです。

ご感想、ご意見、ご指導、なんでもお待ちしております。よろしくおねがいします！

第2話 遊撃艦隊（前書き）

簡単な世界情勢を入れたつもりですが、設定上からこの世界は半ば崩壊していることにしているのです。それなりに…。
軍隊が独立企業のごとく振舞う恐ろしい世界です。

第2話 遊撃艦隊

このとき、世界の戦局は終息に向かいつつあった。

長く戦乱に曝されて疲弊した世界各国にある都市の復興を援助すべく、多くの機動艦隊が戦闘の任を解かれて世界各地に拡散、治安維持のための警備艦隊を構成するようになっていた。

しかし、世界各地には、いまだ勢力を保持して息を潜めている帝国軍が復活の機会を窺っていた。

そんな彼らの蠢動に対処することのできる戦力もまた必要とされていたのである。

そのために提案されたのが、特定の母港を持たない攻勢機動艦隊、遊撃艦隊群構想であった。

しかし、世界の疲弊は同盟軍からそんな構想を実現する戦力を根本から枯渇させていた。

事実、世界の広大な海をカバーするのに世界同盟軍が用意できた戦力は、第十一艦隊群から第十三艦隊群までの三個艦隊群のみ。

世界の恒久的平和までは、まだいくばくかの犠牲が必要ないように思われた。

西文明太陽暦1945年帝国暦64年のことである。

南太平洋ポリネシア諸島沖北 1500キロ

戦乱を駆け巡り、短い間に幾多の返り血を浴びながらも、未だ休みを許されない艦隊群総旗艦「邪馬台」はその速度を緩めることなく南へと向かっていた。

この時点で、母性と残虐性を秘めた彼女によって率いられた艦隊は、同盟軍の中でも最強の戦力とされていた。

しかし、同時にこの世界にとって最も異端な存在によって運営されている異質なものでもあった。

事の発端はかつて戦乱の只中に時空の突然の歪みに乗じて突如として迷い込んだ一群の放浪軍人達によるものであった。

彼らは自らを、大日本帝国海軍の一員だと言った。

目の前の世界が地表面の形状を除いて全てが一瞬にして変わってしまったことへの彼らの精神的衝撃はまさに想像を絶していたであ

ろう。

彼らは自分たちの祖国と共に、戦う理由や存在意義すら問い直さなければならなかったのである。

しかし、現実には彼らに思い悩む暇を与えなかった。

当時の世界は、自ら以外の力を認めることを許さず、世界の覇権をほぼその掌のうちに納めた帝国と、それに対して果敢ではあったが絶望的な戦力差にあえぐ解放軍。

この世界に力を持って対立するイデオロギーはこの二つだけであると云っても過言ではなかった。

放浪軍人たちは時空転移の直後、なんとも間の悪いことに帝国軍の水雷戦隊の眼前に出現してしまったのである。

彼らは否応無く帝国軍との戦闘に巻き込まれ、世界の情勢を知ることの無いまま全滅しようとしていた。

しかし、本来の帝国軍の標的であった解放軍艦隊に援護を受けて、彼らは死を免れたのである。

そんな彼らが、最終的に解放軍に参加したのは自然な流れだったのかもしれない。

それでも、存在自体が特殊な彼らは戦力不足に悩む解放軍の中とは言え本来ならば所詮ゲストでしかなかった。

しかし、彼らは最終的に極めて大きな存在である「超兵器殺し」となりえたのである。

これは彼らの使い得た強力な道具 H L G 統合設計システムの存在、正確にはその革新的な運用法の確立によるものが大きかった。

H L G は、本来電算機による設計と工廠の橋渡しの存在でしかなかったのであるが、絶望的なまでの人手不足を抱えていた彼らは、その発想を更に発展させて運用することにしたのである。

当時解放軍の内部で一部使用されていた自動建造機械群を集中運用して、設計と建造に至るタイムラグをほとんど皆無にしてしまったのである。

この苦肉の策は見事に当たり、彼らはそれをフルに活用して性能を限界まで追求した高性能艦を次々に就航させて行った。

このときの彼らの手法は、通常よりも大型の船体に、任務ごとに特化された性能の装備をその都度換装して実現したものであった。

よって、実際の運用艦艇はそれ程多かったわけではない。しかし、世界の管理者を自認する帝国軍にとって、任務ごとに最適化されたゲリラ艦の存在はこの上なく厄介なものであった。

しかも、これの阻止に向かった数々の帝国軍艦隊を、逆に現れる先々でことごとく葬ってしまったことが、彼らの存在感を敵味方に大きくして行くことに寄与することとなったのである。

信じられないことだが、それらの結果として本来ありえない戦術的勝利の蓄積による戦略的勝利をも次第に実現しつつあったのだから、それも領ける事実であった。

こうして、駆逐艦数隻でこの世界に迷い込んだ彼らは、短期間のうちに戦力を増強。

同盟軍の主力遊撃戦力になり、後に帝国軍の超兵器に対抗できる唯一の戦力となっていったのである。

勝利を蓄積し、武人としての名誉をほしのままにしていた彼らであったが、その快進撃は登場と同じく唐突に、且つ壮絶に幕を閉じた。

超兵器殲滅作戦「ホーリーグレイル」において、彼らは当時帝国軍にとって最後の超兵器であるTurm級一番艦「ヴォルケンクラッツァー」と相見えることとなった。

短くも壮絶な砲撃戦の末、狂気の摩天楼はそれを生み出した海軍工廠から程近い湾内でその短い生涯を終えた。

しかし撃沈と同時にその断末魔の閃光（後に超兵器動力炉の人為的な暴走と判明した）と共に、艦もろとも彼らは「消滅」してしまったのである。

第十三独立水上強行偵察艦隊の最初の消滅である。

帝国と同盟の最強戦力の同時消滅という幕引きは、当時の同盟軍司令部にとって前者は盛大に、後者は陰湿に歓迎すべき内容であった。

同盟軍の希望の光は、当時一大軍勢力となっていた同盟軍の中で明らかに手に余る存在と化していたのである。

彼らは、そこに第二の帝国の影を見出していたのかもしれない。

それでも、彼らは本質的に政治家というより軍人であったから、彼らの功名を無にすることも考えておらず第13遊撃艦隊群として再建の準備にかかったのである。

そうして編成されることになった艦隊の歴史は、13番目の同盟軍中最後の番号の示すとおり最も浅いものである。これには以前の艦隊名を引き継ぐ意味合いと同時に、再建と言ってもそれが事実上の新設であったことも表していた。

また、折から同盟軍内で機動艦隊によるゲリラ艦隊運用思想から遊撃打撃艦隊群運用思想への転換を画策していたこともあり、彼ら第十三独立水上強行偵察艦隊は機動打撃艦隊群として編成されることとなったのである。

しかも、編成以前の中心的戦力であった艦隊群旗艦「熊襲」はホーリーグレイル作戦の完遂とともに「消滅」していたから、救出されたオペレーター、当時負傷して療養していた次席幕僚ほか数名など一部の乗組員を除いて人的基幹は全て新設する必要があった。

そこで艦隊群の新設に伴って、彼らと最も親交が厚く戦場での共闘も多かった第9艦隊の海江田 匠大將が艦隊軍総司令の任に就くこととなった。

艦隊の構成艦は主に「先人」の残した多くの設計プログラムをベースに性能の制限を意図した改良を加えたものを、やはり彼らが嘗て使用していた工廠を使用して行われた。

そのペースは当時の艦艇不足に伴う建艦ラッシュの中でも飛びぬ

けており、首脳部はその実力に改めて脅威を感じたという。

更に、ここで同盟軍首脳部は人選に自分たちの利益を考えれば不
適当、だけでなく致命的なミスを犯していることに気づくべきであ
った。

実際建造された艦艇は、ダウングレードはおろか、真の意味の改
良を受けた発展版であったのである。無論それが公表されている訳
でもなく実質的な側面を見ることなく彼等は満足してしまったのだ。

しかも、安定化したとはいえ帝国との独立戦争の最中、事務的な
処理の工作も相まって、その艦隊規模は司令官である海江田大将の
裁量に大部分が委任され、予算も第十三独立水上強行偵察艦隊時代
のものを含めての運用も認められてしまったのである。

当時、独立部隊や半ば傭兵と化したゲリラ艦隊が主力の一翼を担
っていた同盟軍では、参加国による国軍以外にも多数の組織体系が
乱立しており、それぞれの勢力は宗主国の援助を受けつつも自分た
ちの予算基盤を持っていた。

再建を目指していた第13艦隊群もその例に漏れず、同盟軍首脳
部としては、自分たちと異なる台所を持つ彼等がその中で動くので
あれば自分たちの腹が痛む訳でもなく、無関心だったのである。

これらの放任のために、いつしか艦隊は本来の同盟軍の意図を超えた存在となっていた。

それは人材面にも言えることで、司令官は各方面より優秀なソフトウェアを集めるために、艦隊群の組織内に人財部を設置していた。

彼等は他の友軍内、民間、ひいては帝国軍内にまで情報網を持つ艦隊群諜報部と連携してあらゆる方面から人的戦力を強化し、充実させていった。

その拡張ぶりは徹底的で、優秀なスタッフや軍人だけでなく、素質として今後優秀になりうる人物、その教育者として有用な人物、ひいてはそのサポートスタッフからその家族に至るまで丸ごと取り込んで組み込んでしまう始末である。

旗艦「邪馬台」内部に「教育部」と呼ばれる幼児教育から大学連なる教育を全てカバーする教育機関があることはそれを如実に表している例といえよう。

この同盟軍首脳部に見えづらい、というよりも完全に欺いて進められた艦隊群強化政策の黒幕は、言うまでもなく司令官の海江田であった。しかも、彼の行動方針が帝国の打倒と言う同盟軍のそれと完全に一致している訳でないことも、後に彼等は知ることとなる。

その後も戦闘は続き、新生なった第13艦隊群は先代と同様卓越した戦果を維持し続けていた。これは、指揮官の才覚と共にその濃厚な装備と運用形態にあると言って良かった。

いずれにせよ、全体の結果として同盟軍の優勢を確固たる物とし、帝国を事実上の分裂、瓦解、消滅させていくこととなる。

ついに1944年の終わり頃、帝国軍は帝都である西欧をも失いつつあった。この後帝国首脳陣は、残る戦力を新天地である南極大陸に集結、要塞化して再起を狙うこととなる。

このとき南極の地に離脱の叶ったのは、彼の地を守り抜いていた帝国軍第4方面艦隊を中心に、一部の王族とも呼べる一族を守って奮闘していた親衛艦隊勢力と軍中枢の一部、各方面軍からの残存戦力のみであった。

大半は帝国の総統部も含めて帝都と共に同盟軍との戦いで歴史の狭間に消えていくこととなり、これは事実上同盟軍の最終的な勝利を意味するものであった。

これ以降、同盟軍は世界運営機構としての道を歩むこととなるが、それに際して自らの大規模な改革を謳い始めることとなる。

これからの世界に必要なものとそうでないもの。

皮肉なことにこの取捨選択の同盟軍中枢における思惑は、嘗てのホーリーグレイル作戦直後のそれと酷似するものであった。

艦隊は太平洋沖をどの陸地にも近づくことなくひたすら南下した。

彼らの航続距離は新型機関と沖合いの中継基地（いくつかは司令部にも知らされていない艦隊秘匿施設。独立した艦隊としての自治性を持つ当時の同盟軍艦隊の特徴である。）によって、地球上ならば殆ど半永久的ともいえるほどになっている。

余談だが、それは居住性についても言えることで、艦隊要員の一人辺りのベッド占有率は1・86にもなる。

これはベッド（病院船も含んだ数ではあるが）が各人に行き渡っているということ、軍事的常識から外れたものと言えた。これは艦隊の所属艦艇の極端に省人力化を図った設計思想がもたらしたやさやかな遺産の一つであった。

第2話 遊撃艦隊（後書き）

作中の「第十三独立水上強行偵察艦隊」はWSGプレー時の作者のアカウント名です。厳密な元ネタはありませんので気にしないでください（汗）。

また、最後のベッドの数云々は第二次大戦当時の帝国海軍艦の居住性が劣悪であったことなどを聞きかじって加えてみました。

大和は特別に良く「大和ホテル」なんて言われたそうですが、再現映画などを見ていると他の艦の状況が想像するのさえ恐ろしくなります。

ご感想、ご意見、ご指導、なんでもお待ちしております。よろしくおねがいします！

第3話 合流（前書き）

中々艦隊の全容が見えてきませんが、しばしお待ちを。
艦隊そのものがはみ出しなんてまずありえませんが、上は気が気でないんじゃないかな。

第3話 合流

3 合流

11月10日

ポリネシア諸島遊撃艦隊補給拠点「ラム・バケット・アイル」ロジステイクスHQ

「まったく。久しぶりに顔を出したかと思えば…。」

拠点統括官のギルボア・ジャンセン大佐は、忌々しげに眼前の巨大モニターを睨み付けていた。

画面には彼が今いるポリネシア補給基地群の全体地図が表示されていた。

彼が睨み付けているのはそれそのものでなく、基地に大挙して入港しようしている膨大な数のシンボルの塊だった。

それぞれは笹の葉のような形で、島一つを優に覆うだけの大きさがある巨大なシンボルが一つ。そして周辺にそれより幾ばくか小さいシンボルで埋め尽くされていた。

巨大なものは、言うまでも無く第十三遊撃艦隊群旗艦「邪馬台」、それ以外は艦隊群を構成する諸々の艦艇である。

ギルボアは何も彼らを嫌っているわけではない。艦隊には友人は多いし、参謀長の村井などとは酒を飲み交わす仲である。

問題は彼らの規模と時期である。

優に150隻に届こうとする艦隊が一度に寄港することは、それだけの数の港内誘導、物資搬入の手配が必要になると言うことを意味する。

それは良い。

それくらいのこととは大規模な汎用補給拠点である「ラム・バケツト・アイル」にとって当然のことと言ってよかった。

問題はそうかと言って直前の連絡を以って突然訪問する彼らの図太さにあった。

機動艦隊とは、本来恐ろしいほど物資を消費する。

数個機動艦隊に相当する遊撃艦隊群ともなれば尚更だった。数が多いばかりか、長期間の外洋行動のために物資を大量に溜め込むからである。

ポリネシア基地の備蓄を半分近く消費する客の突然の来訪など補給担当者にとって歓迎できるはずも無かった。

それにしても、スクリーンに向けられるギルボアの視線は半端ではなく、敵意すらもっているようにも見える。その理由はギルボアの口から呪詛となって外気に触れた。

「こんな突然に…。何もこんな時に…。例え戦争だろうと天変地異だろうと…娘の誕生日に被せて来た罪は重いぞ…。村井い！」

「邪馬台」戦略作戦室

「ううっ…。」

突然書類を整理していた村井の手が止まる。

「参謀長？いかなされましたか？」

「いや…。少し寒気かな。」

秘書官の気遣いに、彼はただそう答えるしかなかった。

村井の一瞬の体調不良を余所に艦隊の入港は順調に進んでいた。

ポリネシア諸島基地群「ラム・バケット・アイル」は、同盟軍の補給拠点と空港群などからなる複合島嶼基地である。

正規軍の物に混じって第13艦隊群直属の補給基地も存在し、特殊装備の整備などはこちらでしかできないようになっていた。

そのため、実際のところ艦隊群が本部基地に入港することはまれである。

今回は急ぎの補給なので通常艦艇は正規軍の施設にも寄港しているが。

本来はリゾート地としても成立する南海の島である。

しかし、そこは軍事施設であり、本来は絶景であるはずの海原と無骨な基地の混在する光景は不協和音以外の何物でもなかった。戦時中ゆえの悲しさである。

到着して数時間後の夕方。

寄港地にてつかの間の休息を取る艦隊司令部の元に追加連絡がなされた。

おかげで各部署の指揮官は休暇を切り上げて、再び旗艦に設けられた艦隊会議室に招集される羽目となる。

皆が席に着いたことを確認して、村井中将は海江田に目配せをする。

が、カップを口元に運んだままで煎れたてのコーヒーの香りに意

識を泳がせていた海江田はそれに気づいていない。

「…。」

一瞬の気まずい沈黙の後、参謀長は何か喉でもつまったのか、会議室に一回大きな咳払いが響く。

うん？と香りの海から海江田が定まらぬ視線を向ける。そしてやっと海江田の齒車が動き出す。

「ん…。では、参謀長。総司令部からの命令をまず聞こうか？」
何事も無かったかのように海江田は始めるのだった。艦隊郡の面々の表情が変わらないところを見ると、どうもこの光景は、彼らの司令官にとって珍しいことではないらしい。

肝心の総司令部からの命令は、以前より更に逼迫していた。

第十一艦隊群向けの支援艦隊を当該海域まで護衛、更に味方艦隊群の一時後退を援護し、なおかつその後帝国軍勢力の撃滅に当たれというものである。

「この様子だと、第十一艦隊群は苦戦中でしょうか。増援どころか、戦闘を肩代わりしろ。ですか……？」

呆れ顔に収まるくすんだ碧眼に静かな怒りの煙を燻らせている強襲上陸艦隊指令、カスパー・リンツ大将が言った。この男、艦隊指令に平然と「助言」できる程の曲者で、この男の言は艦隊群の気風の一つを的確に示していると言えた。

「敵の戦力は予想以上だった。と言う事さ。それに言い方は悪いが、彼らとて混成部隊なりに良くやっているよ。情報部長、何か収穫は？」

艦隊総司令官、海江田である。

今更ながら、おそらく席次によっては駆け出しの次席参謀にも見える。

しかし、この男が現在も同盟軍の最強艦隊を、軍司令部を欺いて育て上げ、しかも勝利をもたらした幾多の戦いで率いているのであるから、人の見た目は宛てにならない。

尤も、彼の場合は見た目以外も宛てにならないのであるが。

そんな司令官の要求にこたえて、中東系の紳士が立ち上がる。

「第十一艦隊群からの戦況報告を受け取りました。戦端を開いたのは昨日〇一二〇。敵の前衛艦隊と戦闘開始予定直前に前哨分艦隊が敵と遭遇、予定時間前に交戦に入れり。

その後現段階までで三回の会戦が行われた模様です。

結果、敵前衛艦隊の弱体化には成功したとのことですが、参加艦隊のうち第四艦隊は壊滅。第二、第八艦隊も3割の損害を出しています。しかも、今後敵後方から敵の本隊である第四方面艦隊が進出してくる可能性があり、損害が軽微な第一、第六艦隊だけでは戦線を維持しきれない可能性があるそうです。敵第四方面艦隊には、例の帝国軍最終超兵器も編入されているようで、戦力は通常の戦闘艦隊規模を遥かに上回り、概算して三個方面艦隊、敵残存兵力のほぼ全軍が編入されているものと思われます。」

情報部のアル・サレム少将が報告を一息置く。まずは表向きの現状説明だ。

「第四艦隊が食われるとは。敵の攻勢も半端ではござらん。航空機動艦隊副指令、英国紳士の形容がぴったりと当てはまるラッセル・アンダーソン少将である。」

老練な航空指揮官で、戦略レベルでの航空戦力の運用に優れた才覚を持つ智将として知られていた。

「敵も必死ということだな。こちらの方も相当に頭の痛い話ではあるが…。ファイル2の成果の方は、それだけではすまないのだらうっ?」

ファイル2。艦隊の航海議事録にも記載されない非公式艦隊諜報活動報告、即ち「同盟軍」内部動向調査報告のことである。

「はっ。正直申しますと敵よりもよほど悪辣であると言えます。」

今度合流する支援艦隊ですが、旗艦はあのラオ提督率いる「呉」です。

総司令部ではどうやら完全なる組織整理が本格的に始まったといえます。今まで前線で功績を挙げていた指揮官に対しての圧力も強くなっているとの報告も入っていました。

第十一艦隊群の被害状況を再度検証してみました。ラオ提督の特支艦隊が出撃しなければならないほどの大型艦艇の要補修艦はありませんでした。損害を受けた大型艦の多くはすでに損失しています。恐らく、戦闘海域に突入後もわが艦隊から離されることはないでしょう。」

「特支艦隊の護衛をしつつ帝国軍の本隊と交戦すれば大胆な攻勢には出られない。しかも輸送部隊を同伴した我々は常に守勢に立たされて不利な状況を強要される…。総司令部の行動もいよいよ露骨になってきたな。」

主席参謀の村井中将の表情も暗い。

最近になって本格的な終結に至りつつある戦局の中で、彼ら独立遊撃艦隊群、特に本国との関係が最も希薄、かつ独立気風の強い第13艦隊群の扱いはますます厳しくなっていた。

有事の組織は平時には負担になるだけ。その思想が総司令部の態度を冷淡なものにしていた。

「こちらが送っている乗員の交代要請にもなかなか応じようとはしません。私もあちらでは肩身が狭いですよ。」

総司令部から派遣されているスーン・スール大佐が嘆息する。本来、総司令部から派遣される将校といえば艦隊の目付け役としての

任も負っているはずなのであるが、この男も最近では艦隊司令部と疎遠になつてゐる。

長期出撃期間の全てを司令部のために冷静に（ある種冷淡に）任務をこなすことが、如何に困難であるかを彼自身が証明していた。本来この手の部署に就く将校というのは、大概本人の強力な愛国心、組織意識の元にその困難すらも乗り越えるものである。

しかし、幸か不幸か、少なくともスール大佐をこの一例として挙げることは難しいことであつた。

「とにかく、残念ながら我々に選択の余地はない。敵の本隊と再度まともにぶつかったとき、第十一艦隊群では対処しきれないであろうことは事実だ。ここで我々までもが抜かれると、帝国軍は再び外洋への出口を得ることになる。それを許すわけにはいかない。」

「総司令部のご老人方にも困つたものです。この戦いも今までと同様、敗れば全てを失うかもしれないと言うのに、勝つた後の算段とは。どうやら彼らには海江田提督の存在がどうしても邪魔に見えるようですな。」

「私だつて、元々生粋の職業軍人というわけでもないし、政治家でもない。何年か前はただの海賊みたいなもんだつたからね。それに、制御できない力なんてものは、それを手札に持つプレイヤーとしては、一刻も手札から離したいものさ。敵の手札になるよりは、いっそ捨て札に……とね。」

村井の会議室の端末が短い電子音を上げる。

「提督。艦隊各艦、物資受け取り完了しました。今後わが艦隊は20戦闘単位の艦隊行動が可能です。」

「よし、航海参謀。こちらに向かいつつある特支艦隊との最適合流点を算出。航海計画の作成に当たってくれ。休暇の時間はあまり残っていないらしい。」

「了解しました。」

艦隊群航海参謀であるフランク・マリノ中將が答えた。物静かな彼だが、海上艦艇だけで150隻近くの大艦隊をまるで一体の生物のように統制できる彼の艦隊運用能力は神業としか言いようもなかった。

「航空参謀。できるだけ早く会合ポイント及び各艦隊の進路上の哨戒活動を行わせてくれ。いくら特支艦隊でも外敵への対応力は比較的低い。我々が十分に彼らを護衛できる体制になるまでは君たちが頼みになる。」

「補助推進器を装備すれば停泊している今からでも可能です。…今航空部に最初の哨戒部隊の召集を下命しました。10分で発進させます。」

航空参謀のカール・ミュラー中將は即座に端末を操作、命令を実行していた。

「各員。これは帝国の時代を終わらせる最後の戦いになるだろう。この闘いに勝利した暁には、これからの同盟は民主的な世界規模の国家をようやく実現できることになる。当然帝国も必死だろうが、ここで流れを止めるわけには行かない。死ぬ気で戦えとは言わんが、味方の誰かを死なせないよう全力を尽くしてくれ。以上だ。解散。」

ポリネシア諸島遊撃艦隊補給拠点「ラム・バケット・アイル」特
大型栈橋

ポリネシア諸島基地の中でも最大の規模を誇る栈橋は、一時のピークを過ぎてひと時の静けさを取り戻しつつあった。本来、7万トン越えの大型艦ですら3隻の同時接岸が可能な巨大栈橋ですら、今入港している「邪馬台」の全てを接岸させるには至っていなかった。

5階建てになっている栈橋建造物。その突端近くのテラスに二人の人影が傾きかけた西日に向けて立っていた。その先に見えるのは小さな島影を除いて、水平線まで海原のみである。

「直前の申請で、基地の浚渫船を総動員して突貫工事を掛けたんだ。今後暫くはこの地区に浚渫は要らんな。」

「無理を言つてすまなかった。時間が無かったものでな。」

「他ならぬ第13遊撃艦隊群の要請だ。「英雄」の手助けができて、光栄だよ。」

「…やはり根に持っているのか？ギルボア。」

視線を僅かに右にずらして、村井はギルボアの様子を伺った。当の本人は腕を組んだまま水平線を見据え続けている。

「持ったら悪いか？娘の誕生日を知っているのは、お前さんこの艦隊では殆どいないんだからな。他にぶつけるものがおらん。」

「やれやれ…。しかし、共に生きていれば誕生日はまた来年もやってくる。今度は平和な日のものに祝ってやる事が出来るだろうよ。」

「共にって。じゃあ、やはり実行するのか！？もう…。」

ギルボアは見開いた目を友人に向ける。

「ああ。帝国軍とも折り合いはついている。決行の条件は揃ったということだ。」

村井は淡々と、言つてのけたが、その友人はそれを全て受け入れることは出来ないらしい。

「世界は確かに平和になりつつある。しかし、その中にお前たちの席が用意されていないわけが無いじゃないか！いくらでも生活する術は…。」

しかし、男は静かに首を振る。

「…そう。確かに世界は変わる。もっと良い方向にな。ただ、我々は少しばかり血に染まりすぎたようだ。この世界に必要ないばかりか、害にしかならんだろう。」

「俺は殺人狂と友好を今まで育んできたなんぞは思っていない！お前だって、本来は血に飢えるようなタマではないだろう？」

しかし、なお食い下がる友人の説得を受けて尚、村井は静かに苦笑するだけだった。

「フツ。褒めているのかいないのか…。だが、私には面倒を見てやる必要のある者が多すぎる。彼らを置いてなぞ、いけんよ…。」

棧橋に吹き付ける穏やかな風が、二人の沈黙の間を通り過ぎる。それは、理解しながらも二度と戻らない時代の流れに対しての慰めのようにギルボアは感じた。

「はあ。どうしようもない阿呆だよ。おまえは。…せめて、達者でな。」

「我が艦隊の最後の補給、確かに受け取った。世話になったなジヤンセン大佐。ありがとう。」

「…礼には、及びません。村井中将、良き航海となることを、ラム・バケット・アイル」一同を代表して、お祈り、申し上げます。」

二人の将校は互いの別れが一時のものでないことを噛み締めつつ、礼を交わして分かれた。

1時間後、出航していく第13遊撃艦隊群旗艦の巨大な艦影が消えるまで、ギルボアの姿は夕日に照らされる棧橋にあったという。

三時間後 海上 旗艦「邪馬台」司令艦橋

艦隊群は月明かりの中を、警戒態勢をとりつつ東南東へと進む。

まず特支艦隊の到着を待つため、合流海域に向かうのである。

旗艦「邪馬台」の広すぎるほど広い司令艦橋は、灯火管制シャッターが下りて薄暗かった。

「電探に感3。目標10を捕捉。S I F Fを受信、特支艦隊を確認しました。会合点到着までおよそ2時間を予定。」

オペレーターの声が響く。

ここでは艦隊群のすべての指令が行われており、その装備、人員の規模はやはり超兵器級と言ってよかった。

海江田はその艦橋の中央部に会議室と隣接して置かれた司令官席に収まっていた。

「ここまで護衛は無しか…わが軍の勢力範囲内とはいえ、潜水艦

にでも狙われたらどうするつもりだったんだか。」

「閣下。情報部からそのことについて報告が入っています。」

傍らにいた副官の角松 正人中佐が手元の端末に届いた情報の到来を告げた。

「…総司令部のほうでも護衛は手配しようとした。しかし、実際には不測の事態で護衛艦をつける状況に至らなかった…。そんなところかな？」

「ご推察のとおり、公式見解では総司令部は第108巡洋戦隊に護衛の任を命じたとしています。しかし実際には、サンディエゴ軍港を発してしばらく後にメキシコ沖で帝国軍の潜水艦らしき反応を探知したとして当該海域に「全艦」が向かったそうです。」

「で、それ以後は彼らの一人旅ということか。」

「はい。通信が途絶したまま回復しなかったそうですが…。108の連中ももう少しいまい嘘をつけないものですかな。「呉」のリーダーには彼らは映りっぱなしだったそうです。」

「公式では「呉」の索敵範囲は通常の輸送船並みとされているからな。無理もない。」

この世界の海軍にはいまだ以前の独立海軍の風潮が残っていた。つまり彼らは、ある程度の戦力を与えられた上で作戦を実行して、その成功度合いにしたがって総司令部から報酬を得ていた。この報酬の投入は艦隊ごとの自由裁量が認められていた。つまり、彼らは自分たちの戦力を働きに応じて強化できたのである。

創設当時の、暴挙とも思える第13艦隊群の強大化の直接の原因

もここにあり。

ほとんど傭兵や海賊の部類に属する様式であるが、実際これによって過去に類を見ない強力な海軍を持つに至った。

この事実の背後には、帝国に敗れた世界各国の国々から、その財産を、解放軍に大規模に放出していたことなどが原因としてある。

が、全容が全て明らかにされていたわけではない。

特に巨大な工廠艦を旗艦とする特支艦隊は、戦闘力こそ低いものの各艦隊との連携や後方での補修整備、新兵器の投入などで確実の戦力を増加させていった存在である。事実、彼らの保有する艦の全てが、軍の基本水準性能をはるかに上回るものを持っており、実は護衛を必要としない存在なのであった。

「輸送艦が軍艦規格のレーダー・ソナー、FCSで完全制御されたミサイルや高性能速射砲で武装しているなんて本末転倒な話ですが、この場合は感謝すべきかもしれませんね。」

「そうでもないかと彼らもやってられないんだろうさ。丸腰で命を盾に戦場で味方を支援なんて、私だったらやりたかないね。」

「ラオ提督が聞いたら腹を立てそうですね。かの方も輸送屋としての誇りがおありでしょうに……。」

「ラオの御仁はもともとなんでもありの運び屋さ。軍に入る前だって、追っ手の帝国警備艦を何隻沈めていることか。あの人は本来護衛を必要としないし、本当のところ下手に自分の艦隊に近づいてほしくないんじゃないかな……。」

事実、彼は後方で戦火をなるべく避けることによって自艦隊の安全を図る通常の指揮官とは異なり、自らも武装して送り先に支援の手を最短ルートで届けることを美徳としていた。

彼は猛将なのである。

第3話 合流（後書き）

ギルボアさん。

単発のつもりで書いてみましたが意外と好きかも知れません。また出せるようにするにはどうしたものか…。

次回はいよいよ戦闘開始です。

無知な身ですが、ご意見、ご感想、ご指導お待ちしております。よろしくお願いいたします。

第4話 対潜警戒（前書き）

一応戦闘開始です。

どうも艦隊決戦というものは舞台に持っていくまでに考えることが多くなってしまう…。

第4話 対潜警戒

4 対潜警戒

恐ろしい数の星の瞬く空。

漂う積雲がその一角を切り取って、それが浮かんでいるのがかすかに見ることが出来る。

その間を、はるか下方に濃紺の原野を望みつつ飛行する銀翼の鳥があった。

ターボプロップによって推力を得るそれは一心に下界の「下」に何かを探していた。自分と同じ生物ではありえないものでできた獲物。鋼鉄の魚を…。

MADブームに反応 !!

続いて高度を落とした彼は水中に「耳」を下ろしてそっと獲物の鼓動を窺う。

…それは、やはり獲物であって、彼らの同業者ではなかった。

判断した鳥の行動は素早かった。

放たれた「嘴」は獲物に向かって確実に距離をつめて行った…。

「邪馬台」司令艦橋

「哨戒中の「ニグリプス」、オクト3から航空戦艦「若狭」に連絡！特支艦隊から南西に50キロ地点に帝国軍所属と思われる潜水艦を捕捉、撃沈！」

「航空戦艦「駿河」、「山城」、「但馬」より対潜哨戒部隊マンタ、タワー、エコー、各飛行隊、順自発艦。哨戒強化に向かいました。」

「やはり現れたか。慌ただしいことだ。」

帝国軍の潜水艦戦術は、基本的に複数潜水艦による群狼攻撃が基本であった。

物量的に同盟軍が有利になっている現在においてもそれは変わっておらず、最初の艦を撃沈できたということはほかに潜水艦が潜んでいる可能性が飛躍的に高まったことを示すのである。

各母艦を飛び立つた哨戒機の編隊は4機編成、機種は全機とも先ほど敵艦を仕留めたと同じ対潜哨戒機「ニグリプス」である。

ニグリプスは広範囲の潜水艦に対する哨戒任務、および早期警戒任務のために開発され、主に反撃能力を有した潜水艦との本格的な戦闘を想定した初の機体であった。

それまでの対潜哨戒機といえば上空から潜水艦を探知し、自機が搭載する対潜兵器で丸腰の潜水艦を屠るだけで良かった。

しかし、潜水艦はそのうちに水中発射型対空ミサイル、有線操作型対空機関砲ブイなどの対抗兵器を装備するようになり、海中対上空の戦いはその構図を一時逆転されることになる。

つまり、対潜哨戒機にしてみれば、自分たちの存在を眼下の獲物に知られたなら、航空機としては貧弱な自分たちが狩られる番となるということである。

ニグリプスは、この構図を再び逆転させるべく開発された新型対潜哨戒機である。

その一見飛行艇を思わせる機体は特に下方に対してのステルス性に優れるという特異な設計を施されており、潜水艦からの探知方法であるシュノーケルセンサーや超長波レーダーの能力を制限するのに十分な配慮がなされている。

また、その主要兵装は海上、もしくは浅深度の兵器を無力化するための60口径57ミリ対海上/対海中機関砲を機体下部のターレットに固定装備している

更にウェポンベイ内部には対海中装備で最も速い目標への到達性能を持つ41式対潜誘導弾を4発装備しているのである。

航空戦艦「山城」の哨戒小队「タワー」は特支艦隊と合流を待つ第13艦隊群とちょうど中間地点から特支艦隊を指す形で集中哨戒を行っていた。

これはある種の絨毯爆撃にも似た哨戒フォーメーションで、横一線に並んだ哨戒部隊が進路上の索敵を極めて短期間に行ってしまうというものだった。

持続性はないが、他の飛行隊とも連結された哨戒回廊は幅50キロにも及び、確実に効果を表していた。

海面下の磁気異常を察知するMADが続けざまに3隻の帝国軍巡洋型潜水艦を探知する。

対潜哨戒開始時に味方の潜水艦は所定の位置についていたことが確認されており、それ以外は全て敵と判断してよいことになる。

編隊から4機のニグリプスが離れ、内2機が内蔵した水中マイクロホンを投下し、三角測定でさらに距離を正確に暴き出した。

この時点で上空で待機していた2機が降下してそれぞれ特定されたポイントに次々に魚雷を置いていく。

この後、潜水艦の乗員たちは魚雷が自分達の上に着水して、ロケットモーターを点火させて突っ込んでくるまで対応するすべを持たなかっただろう。

比較的深い水深150メートル付近を進んでいたその艦は、自分たちの上空への目と耳を持たない状態でこの艦はその生涯を閉じた。

これはある意味で潜水艦らしい最後であった。

しかし、潜水艦らしからざる行動を行った艦が、その3分後に編隊に捕捉された。

帝国軍第4方面軍潜水艦隊所属の「U9061」である。

「艦長。超長波レーダーが周辺に機影を捕捉しました。」

「コロモランをやったやつらかな。見つかったか？」

「恐らくは。更に二機が残ったコロモラン3《ドライ》からの通報で判明しています。」

「コロモラン3《ドライ》、敵哨戒機に捕捉されました！」

オペレーターからの報告でU9061の発令所は絶望的な空気に包まれた。

同盟のやつらはこちらの静粛化努力を完全に無駄にしている！

潜水艦にとって隠れられないことは同時に存在意義を否定される

と同じである。

「いかがなされますか？艦長。」

「私は往生際が悪い男でな。戦争の行方がどうなるうが、相手に楽をさせて勝たせることがめっぽう嫌いときている。どうだ、先任？白旗を揚げるよりも気分が良いと思うぞ？」

この状況にして、笑みを浮かべた艦長に、このときばかりはこの気難しい先任士官も笑ってしまった。

「ふっ……。艦長。前から申し上げたかっただのですが、貴方は頭がイカれてます。ただ、貴方の下で働けてよかったです……。全艦、対空戦闘用意！潜望鏡深度まで浮上せよ。上の鷗どもにサメの怖さを見せてやれ！」

「おお！」

発令所に低く、勇ましい歓声が一瞬響く。発令所が途端に活気付く中、それを満足げに見ていた部下から「イカれた」と言われた男は、言つてのけた部下を振り向いた。

「本来なら上官に対する侮辱罪は万死に値するところだが、同じく頭がイカれた男を罰することはできそうに無いな？」

「罪なら、何れ「本物の」ヴァルハラで。それとも地獄になりますかな。」

「恐らく後者だが。道連れは多い方がいい。寂しくないからな。」

艦長は発令所の天井をにらみ付けた。まるでその向こうにいるであろう鉄の鷗を誘うように。

「潜望鏡深度です！」

「よし！イルミネータ上げる。捕捉次第攻撃開始。VLS順次開放。『ココシユナス』も使うぞ。全機展開させる！」
「ヤーヴォール！」

帝国軍の巡洋潜U9061には合計16セルの対空ミサイルVLSと4基の有線操作型対空機銃座「ココシユナス」を備えており、潜望鏡で彼らを狙っていた哨戒機を発見するや全力で攻撃してきた。

が、下方面のステルス性能に重点を置かれたニグリプス相手では、潜望鏡のイルミネータに依存しているVLS発射ミサイルでは、命中率が急激に低下した。

新兵器の対空銃座は低空を高速で入れ替わりに飛び回るニグリプスを捕捉することに手を焼いていた。

浮遊砲台という物はその特性上、海の波に正直に翻弄されやすい代物なのである。

それでも機銃弾の何発かはそのうちの1機を捕らえ、機体を大きくぐらつかせて見せた。

しかし反撃もそこまでだった。逆に他のニグリプスに、彼ら自慢の57ミリ機関砲でさまざま沈黙させられてしまったのである。

対空ミサイルもすべて撃ちつくしてしまうと、もう進歩したU9061もただの潜水艦でしかなかった。

急速潜航による深深度への退避は潜水艦における基本戦術だが、この場合は行動が間に合わなかった。

万策尽きた帝国の戦士達は、潜水艦乗りとしての最も神経をすり減らす「待ち続ける」という苦しみを味わわずにすんだ。

彼らは深海の深みを目指した。

しかし、逃げおおせる唯一の可能性は、水中を魚雷のように飛んできた機関砲弾に阻まれた。

U9061 発令所

「浸水、止まりません！主機閉鎖します！」

「ダメか…。」

発令所も流れ込む海水で満たされようとしていた。

艦長は潜望鏡にしがみ付きながら意識が薄れていくのを感じた。

ここまでのようだ。

人生最後の言葉。

いつもはお題目としてしか考えていなかった、あの言葉。

最後まで、心と共に唱えてやるぞ。

「ジーク、カエサル…。」

バラストを穴だらけにされて、U9061は海底の奥に全ての乗員とともに沈んでいった。

いまや誰も目指すことのなくなった深みに…。

航空戦艦「但馬」艦橋

「艦長。エコー1より報告。第三派集中哨戒終了。戦果、帝国軍巡洋潜6隻を撃沈内一隻はU9000型と判明。被害、「山城」所属、タワー3被弾、不時着水。機長以下乗員全員の生存を確認。迎えのへりに乗って乗艦に帰投中。以上です。」

副長の忍野 宗賀中尉の報告に艦長のセルゲイ・ボルコフ大佐は目を細めた。

「確実な戦果だな。元も取れておる。ただし、対潜警戒は緩める

な。まだどこにやつらの生き残りが潜んでいるか分からんぞ。艦隊の集結完了まで航空隊のみが頼りだからな。」

「はっ。しかし、潜水艦による浸透攻撃のみとは何か不気味なものを感じます。これではただの嫌がらせではありませんか。」

忍野の指摘する点は最もであった。しかもこちらの動きを牽制するに於ては交戦した敵潜の数は少し多すぎた。

それでも第13艦隊群を敵に回して撃破してくるにはあまりにも戦力が足りなすぎる。そして何よりあっさりとしすぎていた。

そこに彼が感じたのはどこか不気味な違和感だった。

「…うむ。反撃してきたのは確か、離れた場所に布陣していた一隻のみだったはずだな？」

「はい。特支艦隊と我々の間との連絡線とも大きく離れておりますので、危うく見逃すところだったそうです。」

そして忍野の言葉はその違和感を裏付けていた。

「帝国とて今は人材が枯渇しつつあるはずだ。ここまで簡単に戦力を浪費するとは考えにくい…。敵潜の発見地点を海図上に表示してくれるか。」

オペレーターの了解とともにメインディスプレイに作戦海域の海図と各潜水艦の果てた地点が表示された。

「やはりな…。すぐに「邪馬台」に打電！海江田司令に以下の内容を伝えてくれ。すでにお気づきかもしれんが、念のため…。」

そのころ旗艦「邪馬台」では、ボルコフ艦長の予想通り、すでに敵潜水艦一隻と、有線誘導の偽装潜水艦艦隊の存在に気づいていた。

海江田は艦橋に隣接した会議室で再び短い作戦会議を開いていた。

「敵は恐らく人的被害を最小限に抑えた上で、わが艦隊の動きを牽制していると思われる。敵としてはこれ以上多くの戦力と同時に渡り合いたくはないはずだ。自軍の超兵器が戦線に到着するまでに時間を稼ぐつもりだろう。」

だがこちらとしても、第11艦隊にこれ以上の戦闘を強いることは避けたい。よって敵潜発見当初の特支艦隊との迂回合流計画は中止し、最短距離で合流することとする。」

「閣下、それでは敵の群狼戦法に直接足を踏み入れさせることにはなりませんか？たとえ敵が迂回する我々を狙う予定だとしても、敵がこちらの動きに気づいて布陣を変える心配があるのではないのでしょうか？」

村井である。

「確かに可能ではある。しかしこの場合、それによって敵は幾分の不利を覚悟しなければならないことになる。」

司令部の一同が疑問のざわめくとともに空気が停滞する。

が、その雪解けが徐々にだが確実に、しかも自分たちから解けていくのはこの艦隊の人員の優秀さを示していると言えた。

「敵の偽装潜水艦運用構想は、待ち伏せに特化した攻撃力増加構

想でもある。敵潜はあの子機によって単艦ながら多方面からの方位攻撃、言うならばオールレンジ攻撃が可能になったわけだ。

しかし、彼らはその代わりに機動力を犠牲にした。もともと、魚雷の発展型である子機にそれほどの高性能はないし、性能を求めれば彼らの安価な戦力増強方針から外れることになる。つまり、敵としてはこちらの心理を先読みして網に誘い込んで攻撃するしかないのさ。だからこちらは、相手の試算を乱すだけでいい。」

既に司令室に停滞した空気は霧散していた。

「なるほど、能力を求めた故の汎用性の欠如ですか。小官は柔軟性、隠密性こそが潜水艦の強みであると考えていたのですが……。」

潜水艦戦隊のヴィリー・ゼーロ少将が嘆息する。彼はもともと、帝国軍の潜水艦隊の指揮官であり、柔軟な潜水艦運用能力で勇名を馳せた人物であったのだ。人財部のヘッドハンティングの成果の一人である。

「局地的な性能を追求して汎用性を失うのは兵器の進むひとつの必然的な進歩じゃよ。それ自体は別に残念がるこっちゃないさ。相変わらず帝国軍技術陣はいい腕をしちよるわい。」

と楽しそうに答える声があった。

ここにも一人同盟軍に根ざしたものではなかった人物がいる。艦隊技術開発部局のフリッツ・ラング部局長は本来兵器メーカー上りの工学博士である。

この御仁。根っからの技術屋であり、帝国軍は憎むべき敵というよりは技術を競う好敵手としてある部分では尊敬すらしていると言ったある意味での変わり者。

本来戦争ではこのような思想は特に司令中枢組織においてあまり好まれてはいないのだが、第13艦隊群自体が帝国出身者も多く、あまつさえ最も多くの帝国軍と相まみえることもあって、彼らと帝国軍の間には不思議な関係が出来つつあった。

事実、彼らは多くの戦場において帝国軍との交渉役に指名されており、上層部の中にはそれを懸念する声もあるほどだった。

宿敵とは恨みも深ければ逆にその分関係は深いものである。

「そういうことであれば、小官にも異存はありません。現進路周辺の対潜哨戒を特に厳とし、哨戒済みの安全回廊を通過させればよいでしょう。」

「うむ。ミュラー中将、ゼー口提督。今の通りに特支艦隊に「道」を作ってやってくれ。お客様の機嫌を損ねないようにね。」
「さながらパーティーの企画会議である。」

艦隊群司令部の予想通り、その後帝国の潜水艦隊による攻撃はなかった。よって両艦隊の会合はそれほど感動的でも緊張感を伴ったものでもなかった。

しかし、それでもその場に居並んだ鉄の大群は他を圧倒するような存在感を持っていた。

基準排水量40万トンに近づく超巨大戦艦。やはり20万トンに及ぶ海の兵器工廠である「呉」。

そして10万トンクラスまでを収容可能な超巨大浮きドック「ブレスト」である。

この巨大な水上建造物は、通常の排水量は7万トンクラスと大型戦艦級だが、収容する艦に応じて艦体そのものが収縮、内部の乾ドックの容積を自由に変えることができるという特異な性能を持っている。それほど途方も無い艦だから、特支艦隊が発注し、唯一保持している世界最大の船になる可能性を持った特殊作戦艦である。

合流まもなくといったところで旗艦「呉」より連絡が入る。

『こちらは特別支援艦隊司令官、ラオ・ユンファ大将である。海江田提督、出迎えますまんな。感謝する。』

「ご無事で何よりです。こちらとしても、これから死地に共に赴くお客様は大事にしなければなりませんから。」

『ふん。謙遜するな。それを言うなら相手にとっての死地とは、まさに貴官の有する艦隊の現れるところだというのに…。我々としては、そんな貴官たちの艦隊に同行させてもらえるのだから、待遇など特に心配してはおらんよ。』

「ありがとうございます。いずれ貴艦隊には大いに働いてもらわなければならぬと予想されます。今はなるべく、楽をしていただきませんかといけません。」

『フ…。了解しております。更なる旅路に着いた際はお任せください。』

海江田元帥、損傷艦が出ることを見越しての発言だろうか。

しかし、急に丁寧になるラオの口元は、奇妙にゆがんでいる。六十を超えたばかりの提督の目は、まさに今からいたずらを実行せんとする少年のそれであった。

「当面は敵の主力艦隊の撃破となりますので、活躍は「その後」に期待しております。では、また後で…。」

海江田もまた、微笑むにはいささかアクが強すぎる笑みを返して、表向きにこやかに通信は終わりを告げた。

この二人の、短くも意味深な会話は後の展開で明らかになる。

それでもこの通信を近くで聞いていた者たちも、艦隊の中央意思決定機関の者たちである。みな一様に心得ているようである。

彼等の表情は死地に赴く軍人の影と、人生を極限まで楽しんでいる人間の表情が奇妙に同居している。

そう表現するしかなかった。

第4話 対潜警戒（後書き）

ジーク、カエサル！

今はなき栄光の帝国海軍に！

戦争末期の話を書いているとその前の話を描いてみたくなるのは人情でしょうか…。

ご感想、ご意見、ご指導、なんでもお待ちしております。よろしくおねがいします！

第5話 前哨戦（前書き）

会戦の前哨戦（といっても立派に会戦と言える度派手な規模ですが）をかいつまんでみました。

今後興味が復活し次第、もう少し掘り下げる予定（汗）。

第5話 前哨戦

5 前哨戦

11月15日

特支艦隊を加えた第13艦隊群はついに作戦海域に歩を進めていた。

しかし、この時点での到着は増援としてぎりぎりのタイミングであつたといえる。

時系列はこれより6日前、11月9日まで遡る。

帝国軍は太平洋方面に今後の侵攻の足がかりを回復するため、南米大陸への侵攻を開始せんとしていた。

これに対して、ニュージールランド、オークランド港に駐留していた同盟軍第11遊撃艦隊群は迎撃に進発し、帝国軍の側面を捕らえ

るべく東進を急いだのである。

同盟軍に悲劇が起こったのは、作戦予定海域に突入する予定の前日、9日の未明であった。

当時、第11遊撃艦隊群司令、ベルナルド・ブローニング元帥は帝国軍との会敵予想に焦りを感じていた。

同盟軍マゼラン海峡要塞に帝国軍が来襲する予想日が、11月10日。彼の艦隊群が捕捉可能なのは同月12日と予想されていたのだ。

強大な勢力をいきなり総出撃させてきた帝国軍に対して、機動戦力を持たないマゼラン海峡要塞が到着まで保つかどうか…。

目下の彼の悩みはそれであった。

そのため、ブローニング元帥は指揮下の艦隊に対して、可能な限りの高速で目標を目指すように方針を決定付けていたのである。

これが、恐ろしくリスクを伴う行動であることを、彼は身をもって味わうこととなるのだが。

11月10日未明

第11艦隊群は、突如として多数の航空機の攻撃を受けたのである。

強行軍が祟って十分な索敵を行えなかった第11遊撃艦隊群は、初手から苦戦を強いられる形になってしまふ。

この攻撃だけで、艦隊群は1割に及ぶ損害を被り、しかも帝国軍の正確な配置をつかめずにいたのである。

ところが、先手を取ったはずの帝国軍第四方面艦隊司令官、エーリッヒ・フォン・クリューガー元帥も有利な位置を占めながらもやはり焦っていた。

彼の指揮する帝国軍第四方面艦隊には、事実上帝国軍の前期どう戦力が編入されているといっても過言ではなかった。

その為、超兵器級1、巡超兵器級14を含めた総艦艇数284隻という膨大な戦力を彼は預かっていたのである。

いかな歴戦の智将であるクリューガーでも、一個艦隊として機能させるには限界がある。

そのために、このとき彼は艦隊を三分割してそれぞれの機動部隊の間隔を空けて進軍させていた。

実はこの時点で戦闘可能域にあったのは、準アウルス級空母「エウロパ」に率いられた一個分艦隊124隻のみだったのである。

数の劣勢は、この段階で捕捉された場合に非常に分の悪い闘いに導かれることを意味していた。

対する第11艦隊群は準ハリマ 改 級「ケルベロス」に率いられた総艦艇数158隻で、やはり準超兵器級を6隻保有していた。

クリューガーとしては、一刻も早く数に劣る味方前衛艦隊と合流して、同盟軍に対して有利に戦いを進めたかったのである。しかし、戦いは彼の手を離れて暴走を始めてしまい、味方の状況はそのうちに不明瞭になっていった。

この集団の崩壊状態は、彼が指揮する中央艦隊が前衛艦隊に追いつくまで続くことになる。

この時代、新たな超兵器はその制御の難しさから世界には2隻を残すのみとなっていた。その代わりに艦隊の中心戦力として浮上したのが、準超兵器級艦艇であった。

既存の機関を流用する代わりに超兵器開発で培われた超大型船体を用いたこの兵器は、エネルギーキャパシティの差から本家の超兵器ほど強烈な戦力とはなりえなかった。

それでも、通常艦の能力を大きく凌駕した性能を持つこの艦種は、両軍で新たに旗艦として運用されるようになる。

しかも、量産がある程度可能なこれらの巨大戦力は、戦争末期にして超兵器以上に人の命を貪り食った。

幕明けこそ後手に回った同盟軍だが、その後体勢を立て直し、反撃に移った。

わずか一日の戦闘で、両軍は互いの戦力を全面的にぶつけ合い、急速に傷を増やしていった。

クリューガー元帥がことの詳細を再び把握したとき、彼は絶望的な気分になった。

「これが…。私の艦隊の現状だと…認めるというのか！」

再三の戦力温存命令にも拘らず、分艦隊の前線指揮官は同盟軍との戦いに引きずり込まれて、結果として貴下の7割の戦力を失ったというのだ。

これは事実上の壊滅である。

同盟軍もその戦力を半減させたという報告を受けても彼にとって慰みにはならなかった。

この時点で第13艦隊群接近の報が彼の元に届けられていたからである。

彼らには同盟軍最精鋭の艦艇、航空部隊が存在するばかりでなく、現存する超兵器として唯一本格稼動している艦が所属しているのである。

実は、この時点で帝国軍の切り札とも言える超兵器「ブラッディ・カエサル」は、未だその力を発揮できる状態に無かった。

そればかりか、自力航行できないそれを戦場まで曳航するために、戦艦5個戦隊が割り当てられており、それらに護衛戦力を付加した結果として後方艦隊の規模はクリューガーの指揮する中央艦隊と同数の戦力までに膨れ上がってしまったのである。

おまけに超兵器を旗艦とする後方艦隊の進軍スピードは恐ろしく遅いものとなってしまっていた為に、戦闘海域まで更に1両日を要するという有様であった。

総旗艦である準リヴァイアサン級「ドラゴラム」の率いる中央艦隊は、それら限られた戦力で最大の強敵とことを構える必要があっ

たのである。

それを完遂する方策はいくつか用意されていた。

しかし、クリューガーは、胸のうちでそれらに絶対の自信を与えてやることが出来ずにいたのである。

第5話 前哨戦（後書き）

ご感想、ご意見、ご指導、なんでもお待ちしております。よろしくおねがいします！

解説1 遊撃艦隊戦力概要(前書き)

ここで、本格的な戦闘の前にどれくらいの戦力、兵器の内容を想定しているかを簡単に紹介します。

解説集とかにまったく興味の無い方は読み飛ばしていただいて結構です。

高校生の想像力ってこんなもんか…。

解説1 遊撃艦隊戦力概要

同盟軍第13遊撃艦隊群 艦船戦力

艦種別保有数（輸送艦を除く大型艦は、準超兵器級に分類）

超兵器級前線拠点戦艦：1
大型砲撃戦艦：2
大型特殊装備戦艦：1
大型航空戦艦：3
中型航空戦艦：3
大型航空母艦：2
中型航空母艦：4
防空重巡：13
汎用重巡：7
汎用重駆逐艦：77
双胴強襲揚陸艦：2
潜水艦：15
大型工廠艦：1
大型機動浮きドック：1
大型輸送艦：12
計：146

艦隊編成

司令艦隊

・旗艦前線基地戦艦「邪馬台」艦隊群司令長官：海江田 匠元帥

司令官付副官：角松 正人中佐

艦隊群主席参謀：村井 忠志中将

艦隊群付派遣参謀：スーン・スール准将

艦隊群航海参謀長：フランク・マリノ中将

艦隊群航空参謀長：カール・ミュラー中将

- ・ 中型航空母艦「聖龍」
- ・ 防空重巡「抹汰角」マツタホルン
- ・ 防空重巡「十勝」
- ・ 汎用駆逐艦「夕雲」
- ・ 汎用駆逐艦「群雲」
- ・ 汎用駆逐艦「積雲」
- ・ 汎用駆逐艦「卷雲」
- ・ 「雲」級汎用駆逐艦 4隻
- ・ 「流」級汎用駆逐艦 6隻

強襲航空機動基艦隊

第一航空機動艦隊

- ・ 基艦隊総旗艦航空戦艦「筑紫」航空機動艦隊副指令：ラッセル・
アンダーソン少将
- ・ 航空戦艦「吉備」
- ・ 航空戦艦「因幡」
- ・ 航空母艦「晃鳳」
- ・ 航空母艦「晦鳳」
- ・ 防空重巡「八甲田」
- ・ 防空重巡「八幡平」
- ・ 防空重巡「蔵王」
- ・ 防空重巡「磐梯」
- ・ 汎用駆逐艦「筋雲」
- ・ 汎用駆逐艦「狼雲」
- ・ 汎用駆逐艦「急流」
- ・ 汎用駆逐艦「清流」
- ・ 汎用駆逐艦「滝流」
- ・ 汎用駆逐艦「怒流」

- ・ 「雲」級汎用駆逐艦 3隻
- ・ 「流」級汎用駆逐艦 3隻

第二航空機動艦隊

艦隊旗艦航空戦艦「磐城」艦隊司令官：エルンスト・メックリンガー大将

- ・ 101、102、103、104、105 防空飛行隊
- ・ 航空戦艦「但馬」 艦長：セルゲイ・ボルコフ大佐
- ・ 201、202、203、204 防空飛行隊
- ・ エコー対潜哨戒飛行隊
- ・ 航空戦艦「若狭」
- ・ 301、302、303、304 防空飛行隊
- ・ オクト対潜哨戒飛行隊
- ・ 航空戦艦「山城」
- ・ 401、402、403 防空飛行隊
- ・ タワー対潜哨戒飛行隊
- ・ 航空戦艦「駿河」
- ・ 501「ジニー」、502、503 防空飛行隊
- ・ マンタ対潜哨戒飛行隊
- ・ 航空母艦「鋭隼」
- ・ 防空重巡「武尊」
- ・ 防空重巡「五龍」
- ・ 防空重巡「霧牙」
- ・ 汎用駆逐艦「雲海」
- ・ 汎用駆逐艦「霧雲」
- ・ 汎用駆逐艦「荒流」
- ・ 汎用駆逐艦「凱流」
- ・ 汎用駆逐艦「賢流」
- ・ 汎用駆逐艦「禅流」
- ・ 「雲」級汎用駆逐艦 3隻

- 「流」級汎用駆逐艦 3隻
- 戦艦戦隊
- 戦隊旗艦戦艦「美濃」
- 戦艦「土佐」
- 特殊実験戦艦「盤古」

第一前衛遊撃哨戒艦隊

- 艦隊旗艦航空母艦「仙鶴」
- 1101 防空飛行隊
- 防空重巡「乗鞍」
- 防空重巡「荒島」
- 汎用重巡「国分」
- 汎用重巡「鹿島」
- 汎用駆逐艦「奔流」
- 汎用駆逐艦「騰流」
- 汎用駆逐艦「朧雲」
- 「流」級汎用駆逐艦 5隻
- 「雲」級汎用駆逐艦 5隻

第二前衛遊撃哨戒艦隊

- 艦隊旗艦航空母艦「神鶴」
- 2101 防空飛行隊
- 防空重巡「津衛^{ツヘルマツト}榴抹斗」
- 防空重巡「聖」
- 汎用重巡「大須賀」
- 汎用重巡「的場」
- 汎用駆逐艦「神流」
- 汎用駆逐艦「砕流」
- 汎用駆逐艦「笠雲」
- 汎用駆逐艦「星雲」

- ・ 「流」級汎用駆逐艦 5隻
- ・ 「雲」級汎用駆逐艦 5隻

強襲揚陸分艦隊

- ・ 分艦隊旗艦双胴強襲揚陸艦「大潮」艦隊司令：カスパール・リンツ大将

機甲師団2個

機械化歩兵師団2個

- ・ 双胴強襲揚陸艦「灘潮」

機械化歩兵師団2個

特科砲兵師団1個

支援師団1個

- ・ 護衛戦艦「琉球」
- ・ 汎用重巡「矢城」
- ・ 汎用重巡「鶴見」
- ・ 汎用重巡「有馬」
- ・ 「流」級汎用駆逐艦 6隻
- ・ 「雷」級強襲駆逐艦 10隻

遊撃潜水艦隊

- ・ 艦隊旗艦洋上潜水艦母艦「横須賀」

洋上潜水艦母艦「舞鶴」

- ・ 級巡洋攻撃潜水艦 6隻
- ・ 級汎用攻撃潜水艦 3隻
- ・ 級艦隊随伴潜水艦 6隻

同盟軍第10艦隊群所属 特殊支援艦隊

- ・ 艦隊旗艦大型工廠艦「呉」艦隊司令：ラオ・ユンファ中将
- ・ 艦隊随伴型自走浮きドック「ブレスト」
- ・ 「湖」級補給艦 12隻（内4隻は第13艦隊群所属）

各艦船諸元

艦種別任務および要求特性

駆逐艦

艦隊と言つ戦闘集団において数的に最も主力を構成する駆逐艦は本来艦隊戦における副次的かつ広範囲な任務をこなす存在である。

対艦、対空、対潜、対地、哨戒、偵察、護衛等多岐にわたる任務を全て遂行できるその汎用性は艦の装備に卓越したバランス能力と柔軟性を要求する。しかも、ワークホースとして一定数の数量を確保しなければならぬため、コストとしても高騰を避けなければならないと言つジレンマも存在する。

しかし、第13艦隊群所属艦艇についてはこれの優先性に若干の差異がある。レジスタンスとしての小規模なゲリラ戦術を活動の根底に持つ彼らにとつて、帝国軍の堅固な防衛態勢を少数の戦力で突破し目標を達成する必要があつた。故に基本的に戦場において彼らに数的な有利は望むべくもなく、必然的に個艦単位での戦闘能力を追求せざるを得なくなつた。

この為に、艦隊群に配備されている艦の歴代の駆逐艦はその設計段階から船体に軽巡洋艦に匹敵するキャパシティを要求されている。また装備面の進歩によつて、再建時より装備されている「雲」級、第二次生産型の「流」級とも強大な火力を誇る。加えて強襲駆逐艦の「雷」級に至つては対地／対艦用大型噴進弾発射筒装備等によつて戦艦クラスの敵艦に対しても十分な対応力を有するに至つた。更にこれらに施された対空／対潜装備も常に更新されてきているために、大型の船体とも相まって従来の駆逐艦の概念を一新する存在となつている。

ただし、性能の向上に伴うコストの上昇も当然の帰結であり第13艦隊群を除く他の部隊での配備状況は多いとは言えず、扱いても軽巡洋艦となつていくことが多い。「第13艦隊群には駆逐艦なんて1隻もない。故に彼らは水雷戦を行うことができない。」とは主力

駆逐艦を「雲」、「流」兩級で全て固めることができた第13艦隊群の潤沢ぶりを羨む皮肉である。

「雲」級汎用駆逐艦

基準排水量：7,200 t

満載排水量：8,850 t

主機：ガスタービンCOGAG方式（後にトリウム軽水炉）

速度：53 kt

兵装：80口径15.5センチ単装速射砲 2門

85口径57ミリ回転式両用機関砲 4連装4基

多目的噴進弾垂直発射筒区画 240基（前甲板96基、後甲板144基）

短距離対空噴進弾垂直発射筒区画 20基2セット

61センチ汎用魚雷発射管 連装2基

長砲身30ミリ回転式邀撃機関砲 6連装4基

40ミリ自動対空機関砲座 4連装20基

概要：

「雲」級はそれ以前の同盟軍が主力とした、艦隊型大型駆逐艦を踏まえて、大規模な設計変更を行ったものである。俗にいう”Battle Cruiser Class Destroyer（戦闘巡洋艦級駆逐艦）”の初の量産型汎用駆逐艦である。

これ以前には大型重駆逐艦「烈風」、ZZ52型」等の実験型艦船が建造されており、本級はその集大成と言える。航空攻撃に対する艦隊防衛の一端を担う本級の主力兵装は全て対空攻撃が可能となっている。これらを制御するため全方位電探、火器管制機構が完備されており、全ての火器が固有の電探、もしくは中央の管制機構により有機的に連携して作動させることが可能である。

対艦/対潜装備としては、噴進弾の搭載割りに一定数の対艦誘導

弾、対潜魚雷が常備されており、常に一定した対応力を維持している。防御区画は、その兵装の多さからダメコン方面に不安を残すため、各ブロックごとに堅固な隔壁防御と被弾時の衝撃解放設計になっており、最終的な防御威力は対25センチ防御を超える重防御となっている。その分、機関として強力な出力機関が必要になり、予定されていたディーゼル機関では対応できなくなり、高出力のガスタービン機関となっている。

更に、「雷」級で実用化されたトリウム軽水炉が安定化すると、後継の「流」級も含めて全艦が機関換装を行い、艦隊群の航続距離長大化計画を完遂することとなる。

総合性能として高水準なバランスを保持しつつ防空能力に優れる本級は第13艦隊群の実質的な主力艦の一翼を担うこととなった。

「流」級汎用駆逐艦

基準排水量：7,400 t

満載排水量：9,200 t

主機：ガスタービンCOGAG方式（後にトリウム軽水炉）

速度：51 kt

兵装：82口径15.5センチ多目的単装速射砲 2門

85口径57ミリ回転式両用機関砲 4連装2基

多目的噴進弾垂直発射筒区画 240基（前甲板96基、後甲板144基）

61系特型噴進弾旋回発射筒 連装4基

61センチ汎用魚雷発射管 連装2基

長砲身30ミリ回転式邀撃機関砲 6連装6基

40ミリ自動対空機関砲座 4連装24基

概要：

汎用駆逐艦としての対応力を維持しつつ対艦／対陸上戦において

大きな打撃力を求めた結果がこの「流」級駆逐艦である。「雲」級の船体と基本設計を共有しながらも、艦の舷側甲板に大型噴進弾運用筒を追加するために船体がやや延長されている。この発射筒は戦艦、空母等の主力艦艇に対応した、61系対艦誘導弾を始め、対地制圧用のM203無誘導噴進弾等大質量火器を投射可能であり、現在のところ駆逐艦の装備としては後の「雷」級の80系噴進砲砲塔に次ぐ威力を誇っている。その分、近接防空火器の搭載力は制限されているものの、少数戦力による戦力の自己補完の概念は失われておらず、敵にとっては厄介な存在になりうるものである。

それでもランチャーの追加は元々高かった兵器の搭載密度を更に上げており、ウィークポイントの増加によるダメージコントロール能力の低下は重装甲化のみでは対応出来なくなっていた。

よって、片弦の武装に敵弾の直撃を被った場合、基底部に仕掛けられた爆裂ボルトによって両舷の武装が強制的にパージされる方式をとることになった。つまりランチャーの場合一基に被弾すると二基を使用不能なると言うことである。

なお、VLSに至ってはこの限りではない（発射筒を垂直に飛ばそうなど損害を増やすだけである）。

しかし、このランチャーは新開発のEMP集団防空誘導弾の搭載ベースになる等、極めて大きなキャパシティを誇っており、作戦としての運用性に優れる点は見逃すことができない。

「雷」級強襲駆逐艦

基準排水量：9,600t

満載排水量：11,200t

主缶：トリウム式軽水炉

速度：43kt

兵装：80系特型噴進砲 単装4基

多目的噴進弾垂直発射筒区画 64基

多弾頭対艦噴進弾垂直発射筒区画 8基
20ミリ無火薬式対空迎撃システム 連装2基
長砲身30ミリ回転式邀撃機関砲 6連装4基
40ミリ自動対空機関砲座 4連装12基

概要：

本級は本来主力艦並の打撃力を、駆逐艦並の運用性で実現出来るかどうかを試す実験艦であった。

戦列級駆逐艦計画艦「Blitz」として開発されていた当艦は、その欲張りで非現実的な思想も、一時は戦力不足に悩む当時の反乱軍（現同盟軍）首脳部の興味を引いた。

しかし、具体的な設計段階において計画は早くも暗礁に乗り上げてしまったと言える。

主兵装候補として拳がっていた噴進砲の有用性が疑問視され、肝心の対艦打撃力が証明できずにいたのである。よって基礎設計が完成したものの、実際に建造されることはなかった。

以後、この案はホーリーグレイル作戦以降の機動艦隊構想の転換によって、汎用特殊艦艇よりも艦隊型護衛艦艇を必要とした同盟軍首脳部に注目されることもなく、時代の波間に消えていくはずであった。

そこに一つの道を作ったのが、当時第13艦隊群で特殊任務艦としての小型打撃艦建造を目論んでいた海江田司令である。

彼は中央開発部の資料より半ば完成したこの計画を見出すや、お蔵入りとなっていた計画案を復活。強襲駆逐艦計画「雷」として自艦隊群の技術開発部、および特支艦隊兵器開発部に呼びかけて再度この艦を再設計、特殊機動作戦向きの戦闘艦として開発することを要請した。

計画変更に伴い、原案は当時研究中だった新型特殊船体の導入、再設計され各種弾頭が運用可能となった特殊大型噴進砲の搭載、小型艦向けの新型機関として開発されたコンパクトで近年になってや

つと安定化してきた核動力炉など、通常の軍ではまず認められない「特殊」尽くめの改良策が執られて計画は終了。実験艦の建造目処が立つや即座に建造に移された。

これらは多分に先端要素を投入した、計画自体が実験的なものではあった。ただ、本級に用いられた艦のパーツとも言える諸技術はそれ自体、各分野の段階的進化の極みとも言える堅実なものであった。

よって先端技術に特有の信頼性の低下は最小限に押さえられたと言っていていい。それらの統合的な合成と完成は艦隊群技術開発部の勝利といえよう。

このような経緯によって埋没する運命から復活を果たした「雷」級であるが、その実験艦にしてネームシップである駆逐艦「雷」は、性能試験において艦隊群首脳部の度肝を抜くことになる。

主砲の80系特型噴進砲はいわゆるガンランチャーの一種である。短砲身の砲塔より安定した方向性と初速を得た巨大な噴進弾は比較的高い弾道を描いて目標に命中する。

その際の同時火力投入能力は大型戦艦に匹敵し、固定目標、至近距離向けの無誘導噴進弾においては一発あたりの火薬搭載量が1tに達する。

他にも、比較的長距離の移動目標に対する威力を持たせるために軌道修正機能を持った知能対艦砲弾や、対地制圧を目的としたクラスター弾頭砲弾、小型船舶制圧用の親子型対艦ミサイル等、特殊作戦に対応した様々な弾頭が用意されている。

これは単に噴進弾そのものの稀に見る大きな搭載キャパシティによるものが大きい。

ただし、打撃力に重点を置いた故の弱点もまた存在する。一つは新機構の大量投入故の価格の高騰である。当時計画中だった新機能をその有用性以上に「試してみたい」と言う艦隊群技術開発部長の思惑が文字通りてんこ盛りに搭載したために通常の駆逐艦の建造コストを遥かに超える代物となってしまった。

一号艦「雷」のあまりの高額さに、その実態を知った海江田司令は量産向けの再設計を厳命。必要性に欠けると思われる各機能を（ラング部長にしてみれば泣く泣く）省いてなんとか量産コストにこぎ着けた。

それでもその性能は特に低下することはなく、「雷」初代艦長を勤めた後の量産型三号艦「狼雷」艦長は「むしろ使いやすくなった。一号艦はマニュアルの読破だけで一生を費やすし、実のところ艦のすべてを把握している乗組員は自分を含めていなかった。少なくともあの艦についてるスイッチで、自分の知らない物は間違っても触ってはならない。」

事実、この艦は性能試験も兼ねた完熟公開訓練中に様々な未確認情報が報告されている。

「急加速した上に空を飛んだ」、「転覆も同然の急角度にロールをうって旋回運動した」、「横に30ktで進んだ」など機動面だけで非現実な報告が多い。

ただ、報告の際の乗組員の精神状態、疲労の状態を鑑みてもあまりにも荒唐無稽であるため公式記録には記載されていない。諸説あり。

巡洋艦

鹿島級汎用重巡洋艦

基準排水量：16,500t

満載排水量：23,000t

主機：ガスタービンCOGAG方式（後にトリウム式軽水炉）

速度：49kt

兵装：

65口径36.5センチ砲 3連装4基12門（後に36.5センチ

チリニアアシスト/火薬併用砲 3連装4基12門に換装）

長砲身127ミリ六連回転式両用速射砲 連装2基

多目的噴進弾垂直発射筒区画 240基（前甲板128基、後甲板256基）
61系特型噴進弾旋回発射筒 連装4基
長砲身30ミリ回転式邀撃機関砲 6連装6基
40ミリ自動対空機関砲座 4連装20基

概要：

同盟海軍にとって、艦艇の絶対数は常に不足していた。当時世界規模の海軍を有する帝国軍に対して、各地で戦線を維持していくためには数の不利を基本的な前提としておかなければならなかったのである。

しかし、帝国軍にとってもそれは同様で、世界各国に量産配備される艦艇は、どれも個艦レベルの性能は制限せざるを得なかったのである。

鹿島級重巡洋艦は解放戦争前期からの同盟軍の時代背景を色濃く受け継いだ艦である。

そもそもこの艦は、外洋を長距離にわたって航海し、帝国軍勢力圏の手薄な海域より侵入して偵察、強襲行動を行う遊撃哨戒戦隊の旗艦として、「高機動」、「高火力」、「広対応力」という三点を要求された多目的戦闘艦として計画された。

しかし、多目的艦の性とも言える特長の欠如という問題は当然のごとく立ちふさがる。特に三つ目の広範囲の対応力は要求する性能が曖昧であるばかりか、多分に欲張りなものとなった。

すなわち、「水上、水中、対空、陸上のいかなる脅威に対しても互角に対応が可能であること。」、「侵入、撤退のどちらの状況でも対応が可能であること。」、「帝国軍と遭遇した際に、旗艦として味方艦の楯となり、撤収迄の十分な時間戦線を維持出来ること。」である。

要求を実行することは、艦にコンセプトに謳われていない「防衛力」、「作戦指揮能力」、「隠密性」、「長期間の戦闘に耐えるだ

「の搭載力」の要素も優れたものである必要を求めているのである。もはや試算されるスペックすら巡洋艦の枠を超えている。このような無茶を実行に移すあたりが、同盟軍、ひいては第13遊撃艦隊群の並外れた所である。

より生産性を重視した現実的な艦設計に切り替えるべき、と言う反対意見も当然のごとく多数挙がり、結果として第13遊撃艦隊群のみが本級の建造を実行に移すこととなる。

本級の特徴として何より目を引くのが巡洋戦艦と言って遜色ないその規模である。要求される多数のスペックを達成するために、当初から相当の大型化を許可していたために起こってしまった現象であるが、艦としての特性はあくまで巡洋艦であることは、この艦の特殊性を表していると言える。

主砲は、敵艦隊に遭遇した際に、戦艦が相手でもある程度の戦闘が可能である様にと36.5センチ砲を装備しており、打撃力に限れば戦艦に匹敵する。装甲についても「壁」としての役割から戦艦クラスに高められており、他の艦隊群所属艦と同様その防御は厚い。むしろ問題は、これら大型化した船体を巡洋艦レベルに維持するための機関部の強化であり、これについては同規模の戦艦を大きく上回る。これによって本級は巡洋艦として十分な速度を確保するに至った訳だが、別の問題が発生する。

いかな大型化した船体とはいえ、その速度を確保するために機関の占有率が大幅に上がってしまったのである。さりとて兵器、弾薬の搭載スペースを減らす訳にも行かず、結果としてそのしわ寄せは乗組員のスペースにくることになってしまう。

これを解決するため、本級は大胆な迄の省人力化が施され、艦の規模に対して乗組員数は「流」級駆逐艦と大差ないまでに押さえられることとなる。しかし、それでも問題は完全に解決されたとは言えず、後の機関換装によって機関スペースが縮小される迄、鹿島級は艦隊群で最も居住性が悪い艦と言う不名誉な情報で知られること

となる。

五龍級防空重巡洋艦

基準排水量：15,500 t

満載排水量：19,000 t

主機：ガスタービンCOGAG方式（後にトリウム式軽水炉）

兵装：長砲身127ミリ六連回転式両用速射砲 連装6基

80口径25.4センチ多目的単装速射砲 4基

多目的噴進弾垂直発射筒区画 240基（前甲板128基、後甲板256基）

61系特型噴進弾旋回発射筒 連装4基

長砲身30ミリ回転式邀撃機関砲 6連装6基

40ミリ自動対空機関砲座 4連装28基

概要：

第十三艦隊群結成に当たって新設された艦隊群司令部は、新たに機動艦隊型の戦闘艦運用を行うことにした。

しかし、これまでゲリラ型の戦闘様式を取ってきた彼らにとって以前の運用方式に比べ利点とともに逆にリスクもまた存在した。以前であればそれほど必要とされていなかった、エリアディフェンス能力がそれである。

特に防空関連では個艦防空に関して言えば艦隊群所属艦隊の特徴の一つである充実した近接対空火器からも分かる通り万全と呼べるレベルであった物の、離れた位置にある僚艦と相互にカバーして防空空域を構築する広域エリアディフェンス能力に関しては概念として重点を置いているとは言えなかった。

この問題を解決するために、第十三艦隊群は防空戦闘に置ける中核的な役割を担う火力を持つ大型戦闘艦の建造を計画、設計に踏み切ったのである。

基礎設計については、同時期に行われていた「鹿島」級汎用重巡洋艦のものと共用し艤装段階において防空戦闘向けの装備を施すこととした。

結果この艦は防空戦闘を主軸に考えられながらも、砲撃戦向けに建造された「鹿島」級同様強固な構造と装甲を持つに至った。

主砲は当時最強の対空／両用機関砲である127ミリガトリング砲を装備する。これは到達最大射高17000を誇る長距離対空砲を改修、弾体の大型化、砲身の強化の後、機関部を再設計して6連砲身のガトリング機関砲として仕上げた超大型機関砲である。

発射速度は各砲の最大発射速度70発／分から350発／分となるが、バースト射撃時のみの場合各砲6発を800発／分の速度で発射することが可能である。

更に副砲として254ミリ多目的速射砲を装備する。これは主砲を速射性重視の高角両用砲としたために生じた中／長距離に置ける対艦能力の不足を補完する目的で装備された物であるが、当砲も同時に成層圏高角砲として運用可能な両用砲である。

その弾種は、対艦用の徹甲弾、榴弾に始まり、命中性能を格段に向上させた有翼誘導徹甲弾、対地用広域炸裂榴弾、更にこれらの特殊砲弾をベースに開発された特殊対空砲弾など多岐にわたる。これらのバリエーションを多く用意された砲弾をそれぞれ一定以上に機能させるには、その口径は200ミリ砲ではキャパシティが十分に確保出来ずに、結果として主砲よりも大口徑の副砲を装備するに至ったのである。

解説1 遊撃艦隊戦力概要（後書き）

どのようにしたらよりリアルな設定が描けるのでしょうか（涙）。
ご意見、ご指導、アドバイス、何でもお願いいたします。

第6話 合戦用意（前書き）

どうしても前回よりのんびりとしてしまうのは考えすぎてしまうと派手に仕切れないものです。緊迫感をより演出する方法を見つげ次第更新予定。

第6話 合戦用意

6 合戦用意

艦隊総数、支援艦艇も含めて146隻。

第13遊撃艦隊群は第11艦隊群の残存勢力がなお死闘を続ける海原に侵入を果たす。

その隊形は、大きく二つに分離していた。

まず先鋒の艦隊主力の内、第二航空機動艦隊が輪形陣を進めており、両翼を第一、第二前衛哨戒艦隊がその一部となって加わっている。

続く第二陣は、旗艦「邪馬台」を中心に司令艦隊、第一航空機動艦隊、戦艦分艦隊、強襲揚陸分艦隊、特支艦隊がこれもまた大規模な輪形陣で、全体的に航空攻撃に備えた防御向きの艦列で固められた。

海江田にこの戦法を取らせたのも、第十一艦隊群が敵の航空攻撃によって少なからざる損害を被っており、今に至っても敵の航空優勢を覆すことが出来ないでいることによった。

総旗艦「邪馬台」司令艦橋

「航空参謀、警戒管制機からの報告は維持できているか。」
防空指揮所ではミユラー少将が対空システムと各飛行隊の把握に忙しかった。

「バンシーシステム異常ありません。多元全域複合索敵機構にも異常な反応は現在確認出来ません。」

満足げに頷いた少将はしかし、懸念していたことを口に出さずにいられなかった。

「果たして、どこまでこのままでいけるものか。そう長くは無いだろうが…。」

悪い予感というものは当たってしまうものである。

「前衛哨戒航空隊より入電！エリア335、レンジ1200にボギー捕捉！前衛哨戒機が迎撃行動に入りました！」

「デフコンレベルをグリーンからイエローへ！対空警戒を厳にせよ。」

「来たか、この時が…。」

ミユラーのつぶやきが、静かに戦いの開始を宣言したように聞こえた。

海江田はそれらのやり取りを、司令艦橋の眼前に広がる巨大スクリーンから知ることが出来た。

「前衛航空隊から続報は？」

「はつ。2分前。敵の偵察機と接触後直掩機が敵偵察機を撃墜。

しかし、敵にこちらの存在はある程度知られたようです。」

互いの索敵網が接触したと言うことである。

その報告を受けた艦隊群首脳部は次の手を打つに当たって打ち合わせを行っていた。

「早々に奇襲の機会は失われてしまいました。」

参謀席についている村井中将が言を發したが、それほど失望した様子はない。

「まあ、我々の存在は潜水艦出現の時点で知られていたと考えるとよいだろう。恐らく第十一艦隊群のときと同様、まず大量の航空機による攻撃が予想される。まずこれを退けなくてはな…。先だつての被害と戦果の大半は航空戦力によるものだったそうだ。」

「第十一艦隊群からの最新情報によりますと、あと1時間で先鋒の我が艦隊群第二航空機動艦隊と敵艦隊本陣が双方の航空攻撃可能

圏に入ります。」

角松中佐からの情報に、海江田は確証を持てなかった。

「敵さんがそのままの進路を取り続けてくれているとは考えにくい…。偵察機のフォーメーションからこちらの位置もある程度割れているだろう。少なくとも正攻法では決定打には欠けるな…。第二航空機動艦隊のメックリンガー大将に繋いでくれ。」

現在、艦隊群のおよそ半数の戦力を指揮しているエルンスト・メックリンガー大将は紳士然とした容姿を持つ初老の提督である。常に落ち着きを保った指揮ぶりは平時における温厚な人柄ともあいまって「絵に描いたような老副長」といったイメージを彼をよく知らない人物に持たせる。しかし、その穏やかな口調から発せられる命令は、しばしば他を圧倒する存在感、時には冷徹さを含んでいる。

しばらくして長距離通信回線での会話が艦隊司令と、艦隊群総司令、そして双方の艦隊主要参謀を交えて行われ、総合的な戦術が決定された。戦術は即座に実際の計画として変換、実行された。

メックリンガーは自らの旗艦である航空戦艦「磐城」の戦闘指揮所にて最初の指令を発した。

「航空参謀、すぐに攻撃計画を詰めてくれたまえ。戦法はカウンターBを基本に現状に合わせて装備変更。全艦隊群の攻撃機を動員した攻撃になる。各航空母艦、および航空戦艦との連絡を急いでもらおう。」

「了解。待機ポイントを設定、全攻撃隊を長距離侵攻装備で出撃後上空待機させます。同時に第二航空機動艦隊の防空戦闘隊を大規模編成、「バンシー」の通報と同時に全機スクランブルさせます。」

と、メックリンガーは一つ注文を追加する。その仕草はレストランで追加のワインをもう一本…と言った具合である。

「ああ。それなんだがな、防空戦闘隊から三飛行隊ほど腕の立つ

やつをピックアップして待機にしておいてくれんかな？」

「…司令は伏兵を予想されますか。」

「彼らの中心戦力が報告どおり帝国軍第四方面艦隊ならば。まずやってくるだろう。」

「了解しました。ではそのように。」

「うむ。あとは、差当たり攻撃隊の準備を終えてしまおう。彼らが反撃の際の起点になる。」

第一航空機動艦隊 空母「聖龍」航空甲板

旗艦「邪馬台」から最も近い位置にある航空母艦「聖龍」の上では、来るべき出撃の準備が整いつつあった。

海上を高速で移動する浮島の上に幾多の海鳥たちが今にも飛び立たと待機している。

もともと彼らの狙うのは魚などではなく、明らかに人の命であったが。

整備員と、兵器や部品を満載したカーゴローダーが行き来する様を上から見下ろしている視線がある。

嘗てアイランドと呼ばれた航空母艦の艦橋は、初期のそれと全く異なる存在感を有してなお、甲板上に存在しており、人物はその内部で、一番高い位置に立つことができた。

「皆、帰ってこられればよいが…」

「彼らには、これから先にもっと大きな舞台で踊ってもらわねばなりませんからな。今退場されてはギャラの割が合いません。」

傍らの男が続けた言葉にその人物は繊細な顔立ちの眉をひそめた。

「…相変わらずだが、やはり私は貴様のその言い草は好きになれんな。我々も観客ではないのだぞ？」

言われた男は肩を竦めつつも悪びれた様子も無く、上官の流し目を受け止めた。

「無論です。私も、艦長も、彼らと同じ喜劇の道化に過ぎません。問題は喜劇のまま幕を引き、また新たな喜劇を始めることですよ。」

「クロトワ。その新たなスタッフロールにお前は載っているのか？」

「我らが総司令殿と艦長以下クルーの能力と運、ついでに小官の悪運も加われば、おそらく「聖龍」ごと舞台に立ち続けることができましょう。」

副長の言葉に艦長、クゼリア・ドラティ中佐は嘆息して向き直る。「どうやら、わが副長の言葉を借りるなら、未来の闘いに際して副長の「能力」は重要でないらしいな？」

「残念ながら、小官の能力は新たな未来のためより、この舞台より退場しないことに使うので精一杯なわけでして、未来にはせるだけの余力を書いている状況にあるのです。」

クロトワ副長は飄々と言つてのける。

普通の上司ならここで彼の未来は終わろうと言つものだ。

しかし、ここにいる上司は幸運にも「普通」ではなかった。

一瞬彼女の表情が緩んだからだ。

「フツ…。今を生きぬ限り、はせる未来も舞台も無いか…。結局私と同じではないか。」

「誰もファイナーレを前に次の舞台の降板を言い渡されたくは無いですよ。それが自分であれ、他人であれ友人ならばね。」

クロトワは言動こそ一見無慈悲で、独善的ではあるがその真意は異なる。口には出さなかったが、クゼリアは自分の副長のそれを表す言葉は好きだった。

「何にせよ、この攻撃が成功させねば、すんなり幕は引けないだろうな。」

灰色の第二種軍服に身を包んだ二人は共に再び甲板上の光景に目

をやる。

喧騒はいまや緊張へと移行しつつあった。

指令艦橋の前に並ぶオペレーターの一人である男が振り向く。

「艦長。エアボスより攻撃隊発艦準備完了との報告が入りました。各作戦機とも順次発艦可能です！」

「了解した。「邪馬台」に発艦体制が整ったことを打電せよ。司令部の発進命令と同時に作戦機は全機発艦。作戦始動空域に向かわせて。」

オペレーターが復唱し、「聖龍」の準備は整った。ここで旗艦から号令が発せられれば、予め用意された殺人計画が一気に動き出す。

それを始動させることに躊躇しなくなったのはいつの頃からだっただろう、とクゼリアは一瞬寂しさを憶える。

ひとりの少女は気付かないうちに最強の航空戦力を持つ航空母艦の艦長に変わっていた。

それを促したのは彼女の生活を破壊したとある兵士の銃であり、とある港町を襲った強襲上陸 作戦であり、それを行った帝国軍であり、戦争であり、時代であった。

しかし、その一步を踏み出し、最初の人を殺したの時代ではなく、間違いなく彼女本人であった…。

そんな思考の淀みから彼女を引き起こさせたのはオペレーターの報告だった。

彼女はそれに決然と頷くと、一息置いてから命令を発した。

艦隊群の畏はまだ見えぬ帝国の残り火を包み消すべく、動き始めた。

第6話 合戦用意（後書き）

やっと女性を一人投入できました。しかも艦長です！個人的にはこれからの活躍が期待できる一人になります（予定）。

この話でいつになったら大艦巨砲はその意義を見せるのか！？しばしご辛抱を！

ご感想、ご意見、ご指導、なんでもお待ちしております。よろしくおねがいします！

第7話 接敵（前書き）

未来技術で大鑑巨砲モノを描こうとすると、二律背反する技術問題にぶち当たりますな…。

大砲はぶっ放したい。でも絶対近づく前にお互い見つかる。でも視界外で砲撃戦なんてして欲しくない…。

ジヤマなものは唯一つ。航空機だ！（一つじゃないだろう（汗。）よって恒例の（？）航空戦からおっぱじまります。突っ込みどころしかありませんが、お願いします！

第7話 接敵

7 接敵

進撃を続ける艦隊群の第一陣、第二航空機動艦隊の頭上には、艦隊群出撃より常に張り付いている機影があった。

大型自律飛行策敵レーダーシステム「バンシーシステム」の本体がそれである。

この翼長90メートルを超える巨大な無人全翼機は、そのブローメンを思わせる巨体に似合わず、モーターによって回転する巨大なプロペラによって推力を得ていた。

しかし、大型潜水艦並みの出力を持つモーターの駆動と、高空に巨大なレーダー策敵システムを維持するため、なんとこの無人機には、やはり潜水艦のものを改造した空冷式原子炉が搭載されている。

電波とは、直進するものであり、地球の水平線を越えての探知は出来ない。

空中を、まるでイトマキエイのように遊弋するこの巨大なラジコンは、ただレーダーを高空に維持して広大な索敵範囲を獲得するためだけに存在しているのである。

元より長期の艦隊任務の間、常に上空からの索敵を行えるようにと開発された無人機だけに、その飛行寿命は実に5年に及ぶ。

おまけに補給を殆ど必要としない上に定期的なメンテナンスすら滞空しながら行うことの出来る優れものである。

現在艦隊を見守っている「バンシー参号機」もすでに半月以上、艦

隊の上空を飛び続けている。

この高度1万4000メートルの高空に浮かぶ艦隊の超長距離レーダーは、母体に近づく脅威をこれまで最も早く、正確に知らせてきていた。

その実績は裏切られること無く、今回も哨戒部隊を掻い潜ってきた脅威の接近を真っ先に捉えた。

第二航空機動艦隊旗艦「磐城」艦橋司令部

第二航空機動艦隊の航空参謀にして防空戦闘の指揮を執るアルフレッド・オニール大佐は、報告に耳を傾けるとむせぶように鳴り響く警戒警報の中、正面に広がる光景に顔を向けた。

彼の座乗する「磐城」の司令艦橋左舷より設置された防空指揮所。その中央に据えられた大型戦術ホロスクリーンに映し出した無数のくさび状のシンボルの群れを映し出していた。

迫り来る脅威の状況が刻一刻と自分たちに近づいていることを、それは示していた。

「バンシー・スリー、ベクトルエリア110、レンジ980で目標探知！感2！数：およそ飛行隊15個を確認！」

「続いて逆探にも感！レーダーパターン照合。パターン25AAに合致。敵航空隊の主力はASA-56『シュトルム・フンフ』と思われます！」

「さらに主力編隊周辺、別パターンのレーダー波を確認！護衛機と推測されます。該当機ALF-51『アドラー』の可能性大。編隊高度は二層、12000と11000！」

レーダーオペレーターから直ちに報告が走る。艦隊司令官席に座るメックリンガーはその緊張した報告に対して1オクターブ低い声と明らかに遅いテンポで指示を返す。

「早速のお出ましか。艦隊は現進路を維持。敵艦隊に向かう。防空指揮官、防空戦闘にかかってくれたまえ。」

オニールは銀色の双眸でスクリーンに映し出された戦況を把握する目を一時、司令席に向き直らせる。

「了解！各艦迎撃行動を開始します。」

彼の復唱と同時に、ホロスクリン上に映し出される艦艇のシンボルの内、母艦能力を持つ物の上に新たなシンボルが次々に書き込まれ始める。

「103、104、202、301、402、403、501、504各TFSSスクランブル！同時に第一、第二前衛哨戒艦隊より101、2101TFSSスクランブル！」

「第二次防空隊の発進急がせる。前衛AWACS指揮の下で敵編隊を邀撃せよ。」

「はっ！各艦順次発艦準備中。」

「発艦後戦闘指揮をAWACS「ノルス・レイ」四号機、コールサイン『天狗』に移譲。以上を第一次防空飛行隊として編成。会敵予想時刻算出、Next21。後続の編隊も順次発艦体制へ。」

ここで艦隊のリアクションに対して帝国側にも変化が起こる。

「敵編隊より護衛戦闘機隊の一部が増速！外縁のAWACS自己防衛警戒エリアまでNext03。AWACS「ノルス・レイ」参号機、コールサイン『ミカエル』、敵編隊と距離を置きます！」

オニールは対空警戒が発令される中、既に次の手を読みにかかる。

「（旧式のシュトルムは恐らく単なる囷だ。遠距離攻撃だけで引き返していくだろう…。）観測班！バンシーによる全周囲警戒を怠る

な！AWACSの間隙について敵の本命が来るぞ！」

このとき、艦隊の防空域に低高度侵入を図ったシュトルムは長射程の『ファイゼラー』対艦ミサイルの射程に艦隊の左翼を捕らえようとしていた。

パイロットの眼下を白く泡立った波頭が機体を空からこそぎ落とそうとせんばかりに迫る。

このような低空飛行は、音速を超えている航空機にとって非常にリスクの高いルートだったが、対空ミサイルからの攻撃を幾分か困難にする上で唯一有効といえる侵入経路だった。

シュトルムは身の毛がよだつような安全地帯から転じて発射高度まで上昇。発射体制に入った。

パイロットたちは自らの仕事を完璧に理解していた。レーダー上の艦隊の輪郭を得たら、発射適正角度に機首を持ち上げてスイッチ……。多くの兵士がそれを忠実に実行した。近年急激な防空体制の強化をしてきた「反乱軍」艦隊に対して、旧式の翼を操る彼らが出来るのはそれが精一杯だった。

後の仕事は切り離された無人の猟犬、ミサイルに任せるしかなかった……。

そしてその位置は、艦隊の迎撃火器の射程からまだ70キロばかり離れていたが。

第二航空機動艦隊旗艦「磐城」艦橋司令部

「敵下層編隊、反転していきます。敵編隊付近より高速飛行物体、本艦隊に接近中！到達予測Next03！」

スクリーン上には反転、退避に入った攻撃機の実に4倍はある細かいベクトルを示すシンボルの群れが一直線に艦隊に向かってきてい

た。

オニールは敵の攻撃のタイミングがこちらの予想よりも若干早く、敵に先手を再び取られたことに内心舌打ちしつつ司令席を再び仰ぎ見る。「司令、目標数は100を超えます。EMPコリドールの発動許可、願います。」

オニールの視線を受け止めつつメックリンガーは一瞬だけ眉をひそめた。

（敵もこの手は承知のはず。二の手を打ってくることは確実だが…）それでも彼は頷いた。

現状この方法が最も確実であることは事実だったからである。

「許可する。艦隊集団防空体制をとらせい！」

「了解。艦隊の自動迎撃フェイズ、15秒後に発動予定。」

「各AWACS指揮官に連絡。敵護衛機隊に向かう各飛行隊は、艦隊の射線より至急退避せよ。」

ここで艦隊に向かってくるミサイル群に程近い位置にいた警戒管制機が進路を変更する。一見すると、この行動は艦隊までミサイルに一本の道を用意してやるようにも見える。

オニールはこの推移を確認すると更に付け足す。それは先ほどメックリンガーがひそめた眉の意味するところと同じ動機によるものだった。

「第二次防空隊の発艦を一時待機に。近いうちに第二次攻撃がある。別方位からの侵入に対して備えよ。」

艦隊の防空体制は輪形陣を構成する全ての艦によって連携して作用する。接近する脅威に対して各艦からの距離に応じて火力による縦深陣を敷くためである。

すなわち長距離ミサイルの集団に対して逆に飽和攻撃をかけるので

ある。

今、輪形陣左翼前方に展開していた汎用駆逐艦、重巡洋艦、航空戦艦、航空母艦から一斉に対空ミサイルが放たれた。

各ミサイルはこのシステムの元で運用される特殊なものであるが、それでもその数は向かってくる脅威に比べて少なかった。

通常ミサイルで脅威に対処しようとする際、ミサイルが二つ以上の目標を同時に一発で迎撃することはできないのは物理的に当然といえる。

しかし、そんな常識をよそに、ミサイルの網はその編隊を細長く、そして幅広く広げながら、次第にある等しい距離を互いにとり始めた。

「EMPミサイル群、目標群に接近中。炸裂予定まで残り12。カウントダウン始めます。」

正常に広がっていく「回廊」にクリューガは一瞬笑みを浮かべる。

「これでこの方面はある程度抑えられるだろう。対電磁パルス防御！有効範囲外とはいえ、各艦隊の連絡に支障をきたすな！」

5、4、3、2、1

空間を筒状に切り捨てるように爆風が回りの大気を吹き飛ばした！

ミサイルは完全に同調した爆発によって一瞬空間を白く染め上げる。

炸裂は同時にちょうど交差、正確には炸裂の作った半円筒の回廊部分に低空を飛ぶ帝国軍のミサイル群が飛び込んだ格好になる形で侵入者を包み込んだ。

それは内側から見ればあたかも光のアーチが彼方まで延びるように

見えたであろう。

しかし、その中で爆風に直接吹き飛ばされたものは少なかった。そのほかの多くはそのまま一瞬の光の回廊を抜けて目標に襲進しているかんとしていた。

ように見えた。

海面を震わせていた轟音ははとたんにその勢いを減らして行ったのである。

一機のミサイルのブースターの炎が不安定になったと思つたら次の瞬間には消えていた。

そしてこの現象は一つや二つに起こつたものではなかった。

飛翔体はぐらりと傾いた。

通常ならそこで内蔵されたジャイロによって姿勢を維持するはずが、電子制御された慣性航法装置は答えようとしない。

電磁パルスによって電子機器のみを瞬間的に麻痺させられたミサイルはたちどころに機能を失って海に飛び込んで行く。あるものはそのまま沈んで行き、あるものは触発信管が作動させて兵器としての形ばかりの運命を全うした。

こうして帝国軍の初手は目標の遙か手前で叩き落とされてしまった。

無論どちら側にとつても、この事態は予想の範疇であつた。そして仕掛けた側から言えば、これは切つた手札の本の序章でしかなかった。

実のところ次の手はすでに切られた後であり、それは望んだとおりの形で相手に突きつけられつつあつたのである。

第7話 接敵（後書き）

元ネタは某戦闘妖精のクライマックスより。あんな空中戦闘が描きたい！という憧れだけで描いてしまいました。そのうち細かい空戦描写も描いてみたいですね。∴外伝として（ヲイ）。

アドバイス、ご感想、ご意見、なんでもお待ちしております！よろしく願います！

第8話 直下の恐怖（前書き）

やっとぶっ放すことが出来そうです。

しかし、やはり架空戦記っぽい描写までの道は遠いのが残念なところ。

読者の皆様もご辛抱の上、違う切り口で楽しんでいただけたら幸いです。

第8話 直下の恐怖

8 直下の恐怖

第二航空機動艦隊旗艦「磐城」司令艦橋

「EMPコリドー、正常に展開完了。各方面レーダー、防御体制に移行しました。復旧までCount10。」

艦隊の放った網は巨大な電磁波の渦だった。

荒れ狂う電波干渉は一瞬にして近くに存在した電子装置を破壊し、数多くの脅威を完全に無力化してしまったのである。

電子制御の兵器に対して絶大なる威力を持つEMP兵器であったが、味方の索敵システムをも一時的に麻痺させてしまうのがこのシステムの最大の弱点となっていた。

つまり、最初の一撃をかわされると艦隊の防御システムには短時間ながら無防備な空域が発生するのである。

以前帝国軍はこれを利用して最初のEMPを一時的に自らの電子システムを切ることによって回避すると、その後の間隙について痛烈な反撃を加えることに成功していた。

以後、同盟軍のEMP兵器はそういった小細工の利かない無人のミサイル攻撃のみに使用されており、今回もその範疇を出ることはなかった。

これなら回避する方法は皆無である…はずであった。

「各艦のレーダーシステム、順次回復。バンシー3とのデータリンクの当該部分、復旧しました。」

一時的に目隠しを施されていたレーダースクリーンが次第に元の情報と同じ光景を移し始めた。今まで艦隊に迫っていたミサイルが消え去ったことを以外変化はなかった。

オニールの顔も先ほどからの緊張の色は抜けていない。このとき一部に変化していないことが問題の箇所があったからだ。

レーダーオペレーターは顔色を変える。

「……!? ベクトルエリア280、低空域にレーダー反応あり!」
安堵の色が漂い始めた艦橋の空気が一気に吹き飛ぶ。
喧騒の再開である。

「TF504コールサイン「ピットブルー」より報告。『極低空を進行する飛翔体を肉眼で確認!至急対処されたし。』」

それはシュトルムの攻撃の護衛機であるアドラー隊がその両翼を前進させる形で浸透攻撃を敢行した空域の片方であり、AWACSは半ば空中戦に押しのけられる形で後退していた。

初期発見が艦隊レーダーシステムと迎撃機からの肉眼確認であった理由である。

「ミサイル警報継続発令!EMPコリドーより左舷2キロより本艦隊へ向け進行中の誘導弾合計25を確認!近接防空体制の発令許可願います!」

防空指揮所からの報告と要請に今度はオニールが反応する。

「許可する。一発も通すな!各艦の砲撃管制システムリンクに転送容量を回せ!」

再開された喧騒をよそにメックリンガーはそこの中にあって不動である。

「敵も二の手を心得ておるな。(AWACSを下げた部分から更に超長距離攻撃…。とすると誘導弾は慣性誘導の巡航型。目標艦の破

壊としては明らかに不向きだ。デコイか？…いや。我が艦隊の防御態勢は未だ崩れてはいない。であればこのタイミングの単純な罠はそれほど意味がない。艦隊そのものを狙っているとすれば、その意図は何だ？」

歴戦の将もその攻撃の意味を図りかねていた。

今や電磁波の嵐の脇を抜けてきたミサイルは艦隊輪形陣の防空ミサイル射程の内側に入らんとしていた。

中核の磐城以下主力からのミサイル攻撃はいまだ十分な時間があったが、迎撃ミサイルのシーカーが輪形陣外苑を支える防空艦の大きさの誘惑に負ける危険性があったので、それも不可能だった。

艦隊の各艦は各々の第二の牙を剥かねばならなかった。

本来の彼らの主力兵器である砲填兵器である。射程は長いものの一発あたりの搭載空間を大きく占有し、威力に不満を残すミサイルに比べて、各艦の装備する砲の威力は歴然たる物があった。

そして今、外苑の駆逐艦、巡洋艦の射程にミサイル群は足を踏み入れた。

途端に駆逐艦が「爆発」した。

「雲」級汎用駆逐艦の152ミリ速射砲2門、57ミリ両用ガトリング砲前後2門と左舷の1門、前部艦橋前デッキやマック、後部防空指揮所に装備された30ミリガトリング機関砲。そして片舷10基に及ぶ四連装40ミリ機関砲群が一斉に火を吹いた様はまさにその形容に当てはまっていた。

同時に「爆発」した防空巡洋艦「五龍」は、主砲として長砲身127ミリ六連型ガトリング砲を連装砲塔に搭載したものを前後に6基、更に副砲の254ミリ多目的単装速射砲、「雲」級の2倍に及ぶ近

接対空兵器を搭載していた。

ハリネズミのような戦闘艦艇から発せられた火線は、連射型砲填兵器にしては驚異的な集弾率で、自分たちの脅威に向かって吐き出された。

互いに高速で直進する物体同士が空間で落ち合うのは非常に困難な「業」であるが、FCSに支えられた砲術員と砲弾の合作は、その離れ業をやつてのけた。

たちまち数発が渦の中に飲み込まれて新たな爆発の花を咲かす。しかしそれでも群れは進撃を止めない。それらは通常ミサイルが飛ぶ高度より低く、しかも徐々にだが、更に下げつつあった。

波間に突っ込むほどに。

第二空機動艦隊旗艦「磐城」司令艦橋

「大佐、敵誘導弾の様子が妙です。高度が落ちていきます。既に対空観測可能高度を下回りました。対艦誘導弾の最適攻撃高度も大きく下回っています。このままでは到達前に着水する模様。」

「EMPの余波で航法管制が狂ったか。だが対艦誘導弾の飽和攻撃の効果を疑問視しているのは帝国も同じはず…。何を考えている？」

オニールもメックリンガーと同じ疑問をもった。

「敵誘導弾4、輪形陣外縁1200の海面に着水を水上レーダーで確認。炸裂した模様はありません。」

「不発か？」

しかし、一瞬の疑問の後オニールはレーダー担当でないオペレーターに対して動いた。

「…対潜班！ソナーで敵誘導弾を確認できるか！？」

「砲弾の着水、敵誘導弾撃墜時の残響が激しく観測不能。ノイズに埋まって鮮明な音響画像が得られません。」

ソナー員は数秒間荒れ狂う海中を見通そうと格闘したが、不満足な報告をせざるを得なかった。やがて雑音は収まっていくまでは

「ソナーに感！ベクトルエリア280、深度150に高速推進機音4！本艦隊に向けて急速接近中！」

「やはりな！司令！追加迎撃対応願います！」

とオニールはメックリンガーに次の手を促す。

「うむ。対水中戦開始！」

緊急を要するこの状況で、メックリンガーの声は幾分か鋭さを増していた。

「進路上の外縁艦「怒流」「筋雲」、迎撃を開始しました。」

「「筋雲」より報告！『敵魚雷は深深度を進行中のため自艦通過までの所要時間では迎撃不能！主力戦隊の対応を求む。』です！」

「魚雷、両艦の間を抜けます！輪形陣内に侵入！」

今度は艦隊の対潜課、そして「磐城」の水雷班が動き出す番だった。

「対潜誘導弾、発射します。発射筒、セル1、8、9、16開口。」

諸元入力。用意…てえ！」

旗艦「磐城」のVLS群からほぼ同時に4発の誘導弾が飛び上がった。

それらは艦に対して安全な距離まで上昇すると失速したようにその触先を海面に傾けた。落下するように着水する各弾だが、水中に没するや再度ブースターを燃焼、急加速に移った。

その舳先からはロケットの排気を利用した泡の楯が形成され、それに包まれた水中弾は空中と見紛うほどの超高速で突き進んでいく。ロケットによって射出されたその弾頭部分は先ほど登場した41式対潜誘導弾である。

最高時速が300ノットにも達するそれから相手が潜水艦なら速力で逃げ切ることは不可能な代物だった。

が、目的を最初に果たしたのはまたも帝国軍だった。

輪形陣の中腹に至ったところで魚雷の一発が不意に集団から離脱した。

水中の抵抗によってすぐさま勢いを失って沈降して行くかに見えたそれは、そのままその深度変えずに艦隊と並走し始めた。

…グゴオガガガッ！！

突然猛烈な振動が艦隊の各艦を突き上げた。

海上では「磐城」以下機動艦隊の各艦に配属されたソナー員が猛烈な雑音を耳にして悲鳴を上げていた。

多くは不自然な魚雷の行動に警戒してリミッターに手を伸ばしていたため大事に至らなかったが、対応の遅れた数名はソナーの出力端子とソナー員の鼓膜がオーバーフローを起こしていた。

「水中で大出力音源出現！ソナーイメージホワイトアウト！付近一帯の水中音源を識別できません。」

「恐らくノイズメーカーの一種と思われます。しかし、出力は爆雷の連続爆発に匹敵します！」

「くっ、ここまで直接聞こえている音源だからな。無理もあるまい。対潜誘導弾はどうした!？」

「命中音なし。ノイズ発生直後に目標モーター音をロストしていま

す。」

対潜参謀が危機感をもって発令した。

「外苑艦に周辺の海中探査を徹底しろ！このままでは輪形陣内が潜水艦の隠れ場所になる！」

艦橋員に焦りの色が見える。

「うろたえるな！艦隊の懐に飛び込まなければ何の脅威もない。敵のノイズメーカーの稼働時間とて無限ではないはずだ。」

このときメックリンガーには自分の言を裏付けるだけの自信がなかった。今までの戦いでは体験したことのない不自然さがこの攻撃にはあったからである。

「外苑の各艦より報告！艦の振動が酷く正確な哨戒活動が困難だそうですね。」

通信オペレーターの報告どおり、司令部が置かれたここ「警城」の司令艦橋にも突き上げるような振動とも言つくりの騒音にさらされていた。しかし、これは明らかに異常である。

「魚雷一本の出力でこの威力……。一体なにがこれだけの力を？」

「水面の状況にあまり変化がありません。どうもこの音波は艦体の構造に直接干渉しているようです。」

「共振、か。」

メックリンガーは悟ると同時にスパイの存在を頭にしまいこんだ。

この艦隊の艦艇は基本的に同質の超高張力鋼で構成さされているが、これは艦隊独自の技術であり、ほかの艦隊では帝国はおろか、味方の同盟軍艦隊にもその情報は公開されているわけがない。

本来なら情報が漏れたとしか考えられないのだが、さし当たって今の戦闘に差し挟んで良い雑念ではなかった。

「これでは索敵はかなり制限されるな。空に耳を逃がすしかあるま

い。航空参謀。ニグリプス隊を直ちに発艦。艦隊周辺に対潜哨戒網を形成せよ！」

「了解。発艦まで3分！」

これで艦の対潜哨戒の穴は埋められるはずであった。

しかしまたしても帝国の手が先に仕掛けてくる。

「バンシー3レーダーコンタクト！方位290より敵編隊の接近を確認。編隊数約30！別働隊による攻撃です！」

前線の指揮を空中の指揮警戒機に任せて一時は見守るのみの立場であった防空指揮区画が報告の途端、再び激しく動き出す。

「第二次防空飛行隊全機スクランブル！第一次防空飛行隊も呼び戻せ！」

「了解。102、105、201、302、304、402、403、502、503、601、602、603、604各TFSSスクランブル！目標空域に向かわせます。到達までNext08。同空域に展開中のAWACS『風神』に第二次防空飛行隊の指揮を命！」

そしてオニールは次の命令も出さざるを得なかった。

「只今の航空隊スクランブルによって各対潜哨戒機の発進計画は中断。迎撃機の発進を最優先とせよ！なお、制空権が確保出来ない限り哨戒任務は延期する。」

「第一防空隊エアボス、コールサイン『天狗』より連絡！敵第一次攻撃隊の護衛戦闘機隊がなおも残留。防空飛行隊と已然戦闘中。善戦しつつも未だ増援は不可能とのことです。」

空の戦闘は未だ終結してはいなかったのだ。レーダースクリーンに目をやれば、確かにシンボルの数は当初上回っていた敵のそれを逆

転し、大勢は決したように見える。
しかし、敵が未だに抵抗をやめようとしない限り、戦闘は続くのである。

「レーダーパターン照合！敵第二次攻撃隊、機種判明！主力攻撃機、ASA-58「ヴァイントシュトース」20、護衛は先ほどと同様ALF-51「アドラー」10個編隊です！」

報告を受けたオニールの顔は苦々しげだった。帝国はその残り少ない戦力からなけなしの新鋭攻撃機を、叩きつけてきたことになる。

「やむをえんか…。弾薬燃料補給に戻った迎撃隊は補給と修理の後に再出撃。第二次防空隊に合流させる。」

「了解。」

メックリンガーは来るべき騒乱に一瞬瞑目して考える。

「敵との数量比はおおよそ2対3。性能比を考えると負ける相手でもないが、突破は許すかもしれない。（敵はこちらに本腰を入れている。部下を死なせないようにするのは一苦労ですが…その分、頼みましたぞ？海江田司令。）」

三次元に、しかも目まぐるしく動く戦況の中、第二航空機動艦隊は依然敵を求めて直進を続けていた。

彼方にいるであろう未だ見ぬ敵に反撃の刃を研ぎつつ、今はじつと敵の攻撃を受け止め続けるしかなかった。彼らだけで…。

彼らの後方に展開していたはずの、第十三艦隊群本部艦隊はいずことも無くその姿を消していた。広大な外洋での会戦で帝国軍が己の場を変えつつ、「完全に捕捉した」敵艦隊に猛攻を加える中、彼らの敵もまた本命が姿をくらましていた。

より悪辣な意図を持って。

対する帝国軍も、このとき既に帝国軍の艦隊殲滅作戦はいよいよ発動間近の段階に至りつつあったと言える。世界同盟軍との比嘉の戦力差が加速度的に広まりつつある現在の帝国軍にとって、この南太平洋沖会戦は背水の陣で挑む、まさに全精力を注ぎ込んだ反撃であった。

同盟軍第十一艦隊群には使うことのなかった彼らにとっての切り札。

しかしそれは、本命とされる超兵器とは別の存在であった。

第8話 直下の恐怖（後書き）

ひょっとして共振って船が分解したりしてしまうんじゃない…という不安が頭をよぎっていたりするんですが、技術的にどうなんでしょう

（^^；）

知ってる方いらっしゃったらぜひ教えていただきたいと思います。その他にも、書く上でのアドバイス、ご感想、ご意見、苦情なんでもお待ちしておりますので、よろしく願います。

第9話 海蛇の潜む海（前書き）

ノイズメーカーの発案はかわぐちかいじさんの沈の艦隊より。ソナーの皆さんってめちゃくちゃ耳が良いとかで…それにとんでもない爆音聞かせられたらと思うと鳥肌が…。

第9話 海蛇の潜む海

9 海蛇の潜む海

第二航空機動艦隊汎用巡洋艦「鹿島」司令艦橋

第十三艦隊群の各艦は、戦闘に際して自艦の兵装を全て統括管理する戦闘用司令艦橋を備えていた。

艦橋基部に存在するそれは、強固な装甲に守られて高度な指揮能力をたいていの状態でも維持することが出来るのである（いわゆるCICがこれに当たる）。

本来この場所は艦内で最も静かな場所とされ、波間の音はおろか自艦の機関音すらそれほど聞こえない環境に保つ能力を有していた。

しかし、現在、艦隊輪形陣の外苑の一角を守るこの汎用巡洋艦「鹿島」の戦闘艦橋には異様な騒音が、その発する振動とともに響き続けていた。

帝国軍の特大ノイズメーカーは艦隊の参謀たちの予想に反して20分もの長時間に渡って作動し続けていた。

これによって艦隊の全ての艦は半ば水中に強力なジャミングをかけられた状態に陥り、未だに艦隊の周辺情報を把握できずにいたのである。

「上空の航空戦、第一、および第二戦線において終息しつつあり。各飛行隊健在。損耗率、総合で全体の9%。外苑艦、駆逐艦「笠雲」撃沈。他「荒流」中破、「霧牙」、「奔流」小破。艦隊輪形陣94%維持。」

副長から報告が入る。

「何とか空は凌いだか。問題は海中だな。」

艦長が嘆息するが、苛立ちを募らせる騒音のせいもありその表情は安堵とは程遠い。

「ソナー員。海中のノイズの修正はまだ出来ないのか？」

「はい。艦隊間データリンクを介して敵ノイズの解析にかかっているのですが、このノイズはバランジジャミングのようなものようです。全周波数にわたって干渉されている上にランダムにパターンも変わっています。敵音源を絞り込むことすら困難です。」

艦隊レベルでは対潜対策を一手に統括する対潜参謀が在任しているのだが、個艦レベルではこのようにソナー員が直接対潜策敵システムを統括している。

「ならば敵にもこちらの位置はつかめていないのではないか？ 故下の忌々しい奴らは我々に追従できているんだ？ 無人の魚雷のはずだろっ？」

「恐らく奴らにも初期入力の本艦隊の諸元しか分かっていないはず。後は、磁器探知などが考えられますが、いずれにしても艦

隊の対潜回避運動を本格化させればある程度のかく乱は可能なはず
です。」

「つまり、我々は敵にわざわざ合わせてやっているということか
？そこまで分っているなら何で艦隊は少しも…。」

ここで「鹿島」艦長は艦隊の意図を理解した。

「恐らく艦長のご推察通りでしょう。艦隊司令は待っているようで
す。彼らが次にどうして来るか…。」

「無誘導魚雷による飽和攻撃とかがこう言った場合有効なんだろう
な。それなら対処する側も苦勞もしないんだが…。」

長く待たずしてその答えは得られた。予想した方面より。しかし予
想と異なる方法で。

海中・帝国軍特別水中打撃艦隊旗艦：潜水戦艦「ゼー・シユラン
ゲ」指揮所

「…提督。敵艦隊の輪形陣内部進入に成功。航続艦との有線連絡も
維持しています。艦隊への突入準備、完了です。」

薄暗いそこは周囲を窓のない壁で仕切られた空間であった。各所
に取り付けられた機器と情報を映し出すディスプレイがそこに居並
ぶ人間たちをおぼろげに映し出す。

緊張を声に含ませた士官がその司令官と判る人物に、舞台の開幕のベルが鳴ったことを告げる。

「うむ。作戦発動最終準備。各員水上砲撃戦配置へ移行させよ。」
「はつ。しかし提督。海上の様子は、こちらもソニックジャマ
ーの影響で探知不能です。航空攻撃が不首尾に終わったことで敵の
戦力も完全に分析できずにいます。」

控えめに発言したやせ気味の将校は、目の前の幾分か存在感において勝る相手に対して、未だ不安がぬぐいきれていないことを暗に促す。

本当に仕掛けるのか？と。

「予想より戦力が少ないそうだな。それならばむしろ都合だ。反乱軍の最精鋭と謳われるあの艦隊を仕留めれば、我が帝国の再興への道も早まるというものだ。」

「しかし、ローゼンベルグ提督。本来の計画では第二次航空攻撃でそれなりのダメージを敵主力に与えて後の我が水中戦艦戦隊の突入攻撃のはず。それがほぼ無傷で混乱していない敵主力への攻撃では効果が期待できないばかりか、無謀なのでは…？」

とうとうその将校は言つてのける。

しかし次の反応から、この男はその場で何の安らぎも得ることは出来なかった。

「ヘルシング艦長！ここへ来て君は何を怖気づいているのかね？我が帝国の栄えある潜水戦艦艦隊は、反乱軍の大型戦艦をも凌ぐ火力と戦闘力を有しているのだ。しかも敵にとつていまや完全に死角となった海中からの奇襲攻撃だ！初手の攻撃で敵主力を直射すれば、

敵のエセ超兵器などおそるるに足りん！」

帝国軍特別水中打撃艦隊司令官である、アレクサンドル・フォン・ローセンベルグ少将に一蹴される形で、艦長のビリー・ヘルシング中佐は覚悟を決めざるを得なかった。

「……了解しました。一撃必中を砲術長に厳命します！」

「それでよいのだ。艦長、全艦に伝達せよ！浮上後直ちに砲撃戦に入る。全艦浮上せよ！！」

「了解！タンクブロー一杯！アップトリム10！浮上します！」

帝国の手札が今、同盟軍に叩きつけられようとしていた。

海上・航空戦艦「但馬」司令艦橋

帝国軍の動きは、同盟軍にもある程度予想されていた。

海中の音源が追尾不能な以上、敵の海中からの一手は見張り員によつて発見するしかなかったため、見張り員を総動員して海上に目を光らせていたのである。

戦乱の継続によつて、海上の艦船は人の手によらずとも多くの情報を得られるよう進歩していた。

それでも、高い視力は船乗りにとつて必須の能力であつたし、見落とせば命が危ない乗組員たちは、訓練以来久しぶりの肉眼による周辺探索をやつてのけることが出来た。

この対処は見事に当たり、一人の見張り員から緊急報告がなされる。

「緊急連絡！左舷海面に異常！潜望鏡見ゆ！」

「海面の隆起を確認！敵潜が出現浮上してくる模様！」

連絡を受けたオペレーターによって司令艦橋に騒乱の種が撒かれる。

「いきなり艦隊のど真ん中に浮上だと！？血迷ったかやつら？」

「いや、副長。案外彼らは大真面目かも知れんぞ？敵前に直接浮上ということは恐らくは……」

「見張り員より続けて報告！『敵潜はきわめて巨大！距離1500に浮上！艦影は……？戦艦……？戦艦の如くだそうです！』」

「潜水戦艦？「ドレッドノート」級だとも言うのか！？」

副長が愕然とする間にもボルコフ艦長の指令が飛ぶ。

「砲術長！緊急砲撃戦用意！即発弾、射撃用意！」

「敵艦、レーダーで捕捉、FCSと同調開始。」

「！…艦長！見張りより報告！敵主砲、本艦に指向！退避運動を！」

「まだまだ！敵発砲まで待て。バウスラスター緊急出力用意！甲板長、見張り員の艦内退避だ。敵捕捉は戦術照準用カメラで充分だ。」

「了解。『全乗組員は直ちに艦内へ！砲撃戦配置で待機せよ！』」

航空戦艦「丹馬」は突然の奇襲にも関わらず砲撃戦の準備を整えつつあった。

だが先攻することができないのは誰の目にも明らかであった。

「敵潜、発砲！」

しかし、ボルコフは不敵に貌を歪ませた。

「遅いな。」

（艦隊に「邪馬台」がいなかったのに戸惑ったか。無理もないが、この勝負貰ったな。）

帝国軍特別水中打撃艦隊旗艦潜水戦艦「ゼー・シユランゲ」指揮所

一方帝国軍は奇襲を半ば成功させたにもかかわらず同盟軍よりも狼狽が大きかった。

ボルコフ艦長の予想通り、彼らは目の前に広がる敵影がおよそ自分たちの想像を完全に裏切る物だったことに驚愕していたのだった。

「敵影補足！右舷に大型艦十二を確認！内訳は…航空戦艦五！巡洋戦艦四！空母三！」

「それだけか？超兵器級はいないのか！？」

「確認出来ません！レーダー探索でも右舷敵戦隊を除いては輪形陣を形成する四十隻余を探知しましたが、いずれも超兵器級にありません！」

「提督！僚艦への攻撃司令を願います。各艦とも『初期優先目標確認出来ず。何れを相手にすべきや』です！」

ローゼンベルグは一瞬躊躇した。

様々な困難は自ら予想済みだとある程度覚悟していた彼であったが、攻撃目標そのものが存在しないとはさすがに覚悟していなかったのである。

本来この作戦は、先ず敵超兵器に近距離より集中砲火を浴びせて指揮能力を混乱させる。

それ以後は海中と言う安全圏を活用したヒット&アウェイを繰り返すことによつて敵の兵力を消耗、最終的に撤退に追い込むことを目的としていた。

「今からでも作戦の完遂は可能である。敵旗艦と思われる艦に放火を集中せよ！二斉射の後に急速潜航！攻撃地点を変更する。以下を直ちに実行せよ！」

「了解。直ちに僚艦に伝達します！」

ローゼンベルグが目の前のコンソールに示されたレーダースクリーンに映ったシンボルの一つを指定した。

それは艦隊の輪形陣の中心。

最も巨大な質量を示すシンボルである、航空戦艦「但馬」であった。

このとき狙われた艦が旗艦「磐城」ではなく、先行艦の「但馬」が狙われたことには多少の理由があった。

第二航空機動艦隊の中央主力戦隊は「ゼー・シユランゲ」オペレーターの報告通り十二隻の大型艦によって構成されていたが、その戦隊は更に三隊の単縦陣に分かれていたのである。

並進する各戦隊は、両脇を航空戦艦二、巡洋戦艦と誤認された汎用巡洋艦二。

中央を航空戦艦「但馬」に率いられた空母三隻が航行していた。

実際の旗艦「磐城」はこのとき左翼戦隊を率いていた。

そのため、帝国軍はその配置から「磐城」と同型艦の「但馬」を旗艦と判断したのである。

それはさて置き修正値を入力された潜水戦艦は、その巨大な砲身の向ける先を定めた。

「射撃準備完了！主砲前甲板第一、二砲塔。後甲板第三砲塔目標艦をロック。レーダー追尾開始。修正値順次入力中。いつでもどうぞ！」

「オペレーターより報告！僚艦『ゼーレヴェ』、『ゼーフロント』、『ゼーベア』、『ゼーアドラー』、『ゼーシユテルン』各艦より、攻撃準備完了との報告あり！」

「全艦一斉発射！一発でしとめてみせる！」

「データリンク同調。用意…てえ！」

発令所まで響く振動と共に、巨大な甲板に並んだ「ゼーシユランゲ」の三連装46センチ砲が一斉に火を吹いた！

リンクされた他の潜水戦艦も旗艦に習ってほぼ同時に火蓋を切った。

六隻合計54発もの大質量弾が艦隊主力戦隊に弧を描いていった。

「着弾まで15秒！敵艦回避行動に入った模様。」

「あの密集隊形ではそれほど大きな回避幅は取れまい。次弾装填急げ！修正値入力後直ちに斉射！回避行動に移る。」

「敵艦隊砲列、こちらに指向します！」

「チツ。素早いな。」

ヘルシング艦長の表情はもどかしげである。

超音速の砲弾が目標に到達するまでのわずかな時間が途方もなく長く感じた。

「弾着…今！」

「修正値へ砲塔指向！効果報告！」

「敵旗艦に命中二、至近弾六を確認。後は全て遠弾。弾着は完全に鉄差しています！」

「修正値入力終わり！」

「てえ！」

ズン！

再び灼熱した鋼鉄の鍔が各艦より放たれる。

今度は結果を見定めている時間はない。

「急速潜行！砲身カバー全閉鎖！甲板清流シャッターは省略。とにかく潜れ！」

「バラスト注水！ダウントリム15！両舷全速！」

流れるように指示は飛び実行に移される。

艦長もこのまま行けば逃げ切れると感じ始めていた。

しかし、勝ち逃げを許すほど第13艦隊群は甘くなかった。

「敵艦発砲！敵弾急速接近！」

急げ！急げ！急げ！

ヘルシング艦長は時間の鈍重さに鞭を入れるように念じていた。そして、どうやらその願いは通じたようだった。

「弾着……。今！」

指揮所に響いたのは大質量弾が装甲を引き裂く音ではなくぐぐもった着水音だけだった。

これなら仮にこの後命中しても潜水戦艦の強固な装甲である程度は守りきれぬ。

が、僚艦にまでその思いは伝わらなかつた。

突然、ものすごい衝撃と、金属が強烈な力に屈して張り裂けた時に生ずるいやな轟音が指揮所に襲い掛かかつた。

何人かのクルーは自艦が被弾したものだと思つた。

それは、僚艦の「ゼーレーヴェ」が旗艦「磐城」の主砲弾の直撃に船体を叩き割られた音だつた。

しかも轟音はこれだけに留まらない。

4番目を航行し、潜水する直前だつた「ゼーベアー」が汎用巡洋艦「国分」、「鹿島」の高初速35・6センチの弾着に取り囲まれ、隔壁を貫通。

水中への退避が不可能にされた瞬間だつた。

「提督！『ゼーレーヴェ』、『ゼーベアー』ともに潜航不能！」「戦闘を継続するも戦隊への復帰は不可能」との通信の後、連絡が取れません！」

「くっ……。いきなり二隻を損失とは。二隻が健在な今のうちに体勢を立て直す！ゼロ距離射撃でヒット&アウェイをかけるぞ！全艦両舷全速！深度1000へ！」

もはや対等な勝負等できようはずもなかつた。

「ゼーシユランゲ」を旗艦とするゼーレーヴェ級潜水戦艦は主砲として45口径46センチ砲を三連装三基備えた主力戦艦級の火力を持つ準超兵器の巨大潜水艦だった。

この砲は、二つの巨大勢力によって拡大の一途をたどった戦艦の艦砲の歴史の中にあっても大型の部類に入る物であったため、帝国軍首脳としても主力艦として十分に効果を挙げる物と目論んでいたのである。

しかし、先ほどの一瞬の砲撃戦で二隻のゼーレーヴェ級は、同級の主砲を受けたとしてもなお潜水を可能せしめる超高張力鋼の複合隔壁を貫かれ、絶望的な艦隊戦の舞台に取り残されたのである。

帝国の技術陣はスペック通りの対弾性を実現出来なかったのか？

否。

敵である第13艦隊群技術開発部長をもその能力は認めていたし、実際同級の隔壁はスペック以上の性能を達成していたのである。

つまり、原因は攻撃側にあったのである。

第9話 海蛇の潜む海（後書き）

やっと出ました艦対戦！

でもごめんなさい。お互いほとんど打ちませんでした。

潜水戦艦が仮に実現しても、結局このような運用法しかなかったように思えます。

また、戦闘シーンにもいまいち臨場感が足りない気もします。

ここまで書いておきながらなんですがSomebody Help
！！

というところで感想、苦情、アドバイスなんでもお待ちしております。
す。よろしく願います。

第10話 決意の暴走へスタンピード〈前書き〉

本作の隠れたテーマ「大和を巡洋戦艦と言ってやる世界」ちょっと実現してみました！（コラ）

先人の偉大な成果に無礼極まりないことですが、超兵器とタメ張る艦隊ですから…どうかご容赦のほどをm（|）（|）（|）m
ちなみに大和は私も大好きです！但馬のブリッジは大和っぽいと思
ってしまってください！

第10話 決意の暴走へスタンピード

10 決意の暴走

スタンピード

海上・航空戦艦「但馬」司令艦橋

「各部署、被害報告を知らせい！被害対策班、状況開始！」

「航空指揮所より報告。左舷飛行甲板に敵弾二発が直撃。」

「こちら第三砲塔。敵弾一、本砲塔にて跳弾！損害は軽微なれども電子機器の一部に被害」

「機関室、異常なし」

「左舷喫水線下に一発命中。浸水は確認されていませんが、装甲板に損傷を受けた模様」

「索敵、中央火器管制、通信各システム正常に稼働中。一部ケーブルに断線箇所あり、バイパス回路作動中。なお、ソナーシステムは正常ですが依然として海中の雑音源のため索敵不能。」

「船務参謀、以上の通りだ。ただちに復旧作業を開始してくれ。」

「は。調査員が既に被害箇所へ急行、目下詳細調査中です。」

「左舷航空甲板被害詳細、届きました。甲板基部は健在なれど、甲板表面装甲は第一層から第四層までを貫通。第五層まで被害が及んでいます。直ちに修理にかかれども復旧までは最低一時間を要す。その間左舷飛行甲板は閉鎖。右舷にて航空隊受け入れ準備を進めるということです。」

旗艦「磐城」と同級である「但馬」級航空戦艦は総旗艦「邪馬台」に続く巨体を持つ準超兵器級の巨大航空戦艦である。

その艦構成は、350メートルに及ぶ飛行甲板を両舷に備えており、中央部は戦艦としての形態がそのまま取られている。

しかもこの飛行甲板、通常の航空母艦と異なり強固な装甲基盤を持つている。

更にその強固な装甲基盤を、硬度は低いが、耐衝撃性、耐熱性に絶大な威力を発揮する発泡セメント状の特殊装甲と強化型鋼板を十二層に折り重なった複合装甲版が覆っており、これがそのまま飛行甲板兼第一装甲板となる設計になっていた。

この重防ブロックの表面装甲そのものはかなりあっさり爆散するものの、その際砲弾の爆発力、運動エネルギーの大半を失わせる効果を持つために、艦隊そのものに与えるダメージは最小限に抑えられることとなる。

しかも、自艦に搭載した予備機材により、表層装甲であれば容易に修復することが可能であった。

砲撃戦の際はデッドウェイトとなる飛行甲板ブロックであったが、この方式をとることによって、「但馬」級は非常に堅牢な装甲ブロックを持つ重防艦ともなりえたのである。

余談はさておき、「但馬」は今回の砲撃戦でもその防衛性能を披露して早々に態勢を整えつつあった。

「敵の方はどうだ？ 捕捉できているか？」

「はっ。潜行した敵艦四は水中雑音のためにロストしましたが、命中弾を与えた二艦は距離を取りつつ第一戦隊と砲戦中！」

「よし。お返しをしてやれ！ 全主砲、敵の前方艦を仕留めるぞ！ 後方艦は第一戦隊に任せる。砲撃戦用意、目標、敵潜水艦甲。現弾のまま、全砲門斉射！ 急げ！」

「緒言入力、各砲門修正完了、用意よし。敵艦位置修正追尾中。」
「打ち方、始めい！」

それから一分後、帝国軍潜水戦隊の初撃をしのいだ航空戦艦「但馬」から十二本の火線が轟音とともに「ゼーレーヴェ」に向かって放たれた。

その防御力に対して、ふさわしい火炮とも言える電磁アシスト付七十口径、長56.5センチ砲は総旗艦「邪馬台」の特装砲を除けば艦隊群の中で最大級の砲の一つである。

詳しい説明は抜きとして、「ゼーレーヴェ」を包み込んだ弾着は初撃で深手を負った彼女の脚では避けられるものではなかった。

その空間は猛烈な水柱を幾重にも屹立させ、一刻を置いて爆音とともに立ち上る火柱と化した。

「敵先頭艦の撃沈を確認。後続艦も傾斜から見て保たないでしょう。」

「残るは4隻。次はどう出てくるか…。」

「艦長、本戦隊は我が艦以外は砲撃戦に耐えない航空母艦です。各艦とも被害はありませんが、このまま我が戦隊だけ輪形陣外苑に退避してはいかがでしょうか？」

副長は後方の僚艦を気にしつつ、戦隊長を兼任する艦長の表情を窺う。ここで常識的には主戦場となる主力からなるべく空母を遠ざけるのが、艦隊戦における軍事上の定石といえた。

しかし、当のボルコフ艦長の表情はその定石に明確に反応しなかった。

むしろ何か自分の中で何かが少しずつ出来上がって行く、静かだが膨張していくものを感じる沈黙が一時続いた。

「…あの。艦長？ご指示は。いかがいたしましたでしょうか？」

「…いや。戦隊はこのまま現進路と 艦隊内の位置を維持せよ。」

「！艦長。戦隊は退避させないと？」

「いや、なに。敵が本艦へ攻撃を集中させたことから見ると、どうも旗艦「磐城」と同級で中央にいた本艦を旗艦と誤認したと考えるのが自然なようだな。だとすればこの後も敵の最優先目標は本艦となる可能性が高い。そうは思わんか？」

「しかし、このまま動かなければ今度敵はより接近して攻撃してくるでしょう。戦隊同士の間隙にでもめぐりこまれたら乱戦は避けられません。」

「そう。しかし輪形陣外苑は主戦場から距離を置けるとはいえジャミングの効果も比較的薄い。逆に敵に悟られて集中攻撃を受けるだろう。そうしたらたいした護衛も無く、本艦はまだしも、空母を失うことになりかねん。」

「敵は自らのジャミングによってこちらの中央布陣をつかめずにいるのだとしたら、むしろ、空母群にとってはこの戦隊中央部が最も安全なのは以前変わらんとということだ。」

まだ副長は納得しきれない様子ではあったが、そんな彼にボルコフはなおも続ける。

「ただ、それは空母にとつての話だ。本艦にとつて輪形陣の中央という味方の密度が高すぎる状況下では能力を発揮するにはいかにも狭すぎる。しかも、相手は戦艦型とはいえ潜水艦。数も少ない。乱戦に持ち込むことは望んでも、自分までその渦に巻き込まれることは早々ないだろう。」

「そうであるうとは小官も同意見ではありませんが…それが、何か？」

この問いに答えるように向けられたボルコフの瞳には、抑えようのない闘志とも取れるものが揺らめいていた。

「敵は、次に仕掛けてくるときは我々の位置を把握してくる必要があるということだ。ジャミングは敵のコントロール下。今のこの騒音がいわゆるバラージなら、スポットにすることでそれも可能なのではないか…と言う事だ。」

「それでは、艦長は？」

「戦隊の進路はこのまま。但し戦隊指揮を後続の空母「鋭隼」に任せ、本艦は艦隊右翼後方に移動。防空巡洋艦「霧牙」、「荒島」、「乗鞍」を直衛艦として臨時戦闘戦隊を陣内外苑近くに編成、敵の目をこちらに引き付ける。以上の臨時作戦案を旗艦「磐城」に送信、承認を要請しろ。」

「はっ！直ちに！」

数分後、航空戦艦「但馬」は戦隊を離れ、その巨体に似合わぬ運動性で急回頭をきると予定の編成位置に移動し始めた。

そこには輪形陣を抜けた3隻の直衛艦が待ち構えているはずだった。

「しかし艦長。直衛艦は防空巡で良かったのですか？火力では汎用巡の方が向いていたでしょうに。」

「敵も次は貴官の言ったように近距離に切り込んでくるだろう。その時は、単純な口径よりもあれの速射性と高初速の方が有利と思っ
てな。それに、この輪形陣内ならどこでも主力戦隊の射程内だ。直衛につける必要はないだろうよ。」

そう言いつつボルコフの目は別の理由をも語っていた。

下手に私のジャマをする艦艇がいても困る！

ボルコフの目は貪欲に殴り合いを求めている。

帝国軍特別水中打撃艦隊旗艦潜水戦艦「ゼー・シユランゲ」指揮所

一方海中でも、その牙を研ぎつつ戦いの機を計る存在がいた。

彼らは初手を封じられ、自らも傷ついていた。

とはいえ、未だその牙は鋭く、心も萎えてはいなかった。

何より彼らは自分たちが攻撃を仕掛ける側であると言う戦術的な、それ以上に精神的なアドバンテージを感じていた。

「閣下。後続艦との連絡網、復旧完了しました。作戦続行に支障ありません。」

ヘルシング艦長は前に立つローゼンベルグに報告を入れる。

「分かった。索敵の方はどうだ？」

「二分前に先行投入されたノイズジャマーはジェネレータ出力が低下。現在は後続艦の引く曳航式ジャマーが唯一の発信源となっています。よってジャマーの制御系はこちらで操作可能です。」

「よし、十秒間だけジャマーモードをバレンジからスポットに切り替え。直ちに間隙の周波数で索敵を実行せよ。敵の布陣を確認次第敵旗艦に肉薄。直射によるヒット&アウェイを敢行する！」

「了解しました。後続艦に下命します。しかし閣下。先ほどの砲撃で敵旗艦は多少なりともダメージを受けたのでしょうか？」

「それを確認する意味もある。既に撃沈していればそれに越したことはないが、過度な期待は禁物だ。それに、本来この艦はそういった艦隊殲滅戦術をとるように建造されている。そうではないかね？艦長。」

「しかし、敵の旗艦がさしたる損害も受けず元の位置に居座っていたら、浮上した我々は敵の集中砲火の的になりかねません。敵の反応の早さは先ほどの砲撃で証明されていますし、そのために我々は既に僚艦を二隻失っています。」

彼はまたしてもローゼンベルグの逆鱗を掠めてしまったようだ。

ローゼンベルグはゆっくりと、しかし向き直ったときにはヘルシングの狼狽した顔をその双眸でしっかり捉える位置に陣取っていた。

「艦長。君の命令を受領した後の情況分析は慎重にして冷静だ。しかしいささか状況を悲観しすぎていると言わざるを得ないな。先ほど今回とでは、我々が浮上する瞬間には我々は敵の布陣を全て把握していると言っ一点に置いて圧倒的な優位にあるのだよ！それこそ砲門を完全に敵に指向した状態での緊急浮上、砲撃、急速潜航にこの艦ならば1分と掛からんと出撃時に言ったのは他ならぬ貴官だぞ？違うかね？」

「ハッ！それは…の通りであります。」

この艦長とて、最初から自信がなかった訳ではない。

むしろ作戦発動直後に置いては、彼はこの艦の能力に絶対に近い自信を持っていた。

それが制空権の未確保による索敵の不備、敵戦力の予想以上の抵抗、そして何より第一次攻撃の想像を超えた損害が現在の彼の思考に抗い難い方向付けを強要していたのである。

「うむ。では現在の作戦は予定通り決行する。」

そしてローゼンベルグは不安の霞をその表情から払いきれない艦長に、更に近づくと本人にのみ聞こえるようそつと囁いた。

「ヘルシング君…私は君に期待しているのだ。闘志は常に保つてくれたまえ。」

…よもやとは思うが、予想の域を超えた状況に直面したからと言って、部下の士気を顧みずに及び腰の発言をしてしまうほどに視野狭窄に陥いる程、貴官は無能ではあるまいな？」

「…！…！」

上官の囁きを受けて艦長の顔は衝撃、理解、後悔、狼狽とを一瞬のうちに表現してみせた。

そしてそれらを通過した後、彼は先ほどより幾分か彼の不安の深度を浮上させていた。

陸地と隔離された閉鎖空間である軍艦、殊に水上艦よりも外界との接触が困難な水中艦において、艦長以下乗組員はそれらのみで一つの社会、もしくは生命体として作用する必要があった。

その司令中枢たる艦長に作戦に対する躊躇いが少しでも存在したとき、その症状は態度、空気とも言える物によって瞬時に艦内に伝染して彼らの行動を少しずつ蝕んでいく。

そしてその足並みの微妙な乱れは、極限の戦闘状態に置いては時として致命的な要因ともなりかねない。

提督がたしなめたそれは、軍艦を運営する海軍に置いては常識とも言える思想であり、本来艦長も十分承知していた。

しかし、現在の状況は心持ち一つで変わるほど簡単な物でないことを、表面しか拭えていない不安が冷たく彼の鼻面に突きつけていた。

が、もう後には引けない。

「1番発射管に聴音索敵魚雷装填！索敵ポイントベクトル座標 3
2、 45、 0・45に向けて射出せよ！ピン打ち2射、敵艦の
布陣を再確認後、敵旗艦と思しき艦に集中直射を行う！

僚艦にも打電せよ。この一撃で敵の親玉を葬るぞ！」

「ヤーヴォール！！」

発令所が途端に勢いを取り戻す。

全員自分が何をすべきか完全に理解し、堂々とした働きぶりを見
せていた。

彼らには既に祖国はなく、主義と思想、曖昧となった民族性だけ
がその拠り所だった。

一時期は全世界のほぼ全てを祖国の一部と化した帝国国民には、
今や彼らが最後に祖国に編入した地、南極の大地しか残されておら
ず、今やその最後の輝きすら失いつつあった。

それでも彼らは帝国を築き上げた民族であることは紛れもない事
実であった。

覇者は最後まで覇者たるべし。

帝国軍人の近年に置ける根底指針である。

滅びの美学とも言えるその思想は誇り高くも非常に脆く、危うい
物である。

それを最後まで兵士一人一人に守り抜かせるのも指揮官の役目だ
だったのである。

「索敵魚雷「アウル」、装填よろし！諸元入力終わり！」

兵器指揮所からの準備の完了が告げられる。

「発射管注水！発射腔開け！最終点検！」
「最終点検、clear！いつでも行けます！」

看守の魚雷発射室からの最終確認報告が走った。

「よろしい。これより再度攻勢に出る。提督、よろしいですね？」
「無論だ。行動フェイズ、発動を許可する。」
「了解。：発射管一番、ファイヤー！」

「魚雷航走中。到達点アインまで12秒！」

実際に魚雷が発射されてからは、乗組員の動きが止まることはない。

状況が彼らを突き動かし、一瞬ごとに生存の可能性を左右する賭けに投資していた。

乗組員の誰か一人がその賭けに乗り遅れるだけで、彼らの賭けるチップは唐突に失われることになる。

「アウル、観測点に到達。索敵用意よろし！」
「ソニックジャマー、発信と同時にスポットへ！」
「ピンガー発信用意。3、2、1…てえ！！！」

ピイーンー！

「受信用意よろし！」

「おおおーん

「反応始まりました！ソナーマップ描写！」

指揮所中心に配置されたホログラフィーの布陣図に、敵の艦列が次第に書き込まれていく。

それは当初、先ほどのときと変わらぬ輪形陣を敷いているように見られた。

数箇所の例外を除いて…。

初撃の時点で判明していた布陣と比較していた士官の表情がいぶかしげな物に、そして混乱に変わる。

「提督、先ほどの布陣位置に敵旗艦が確認できません！」

「何だと！敵布陣して再確認しろ！」

「新布陣位置判明！敵旗艦を輪形陣右後方の外延部に捕捉！」

「外延部？どういうことだ？」

ヘルシングに焦りと疑惑が蘇る。

「こちらが旗艦を狙いに行くことを見越しての退避行動でしょう。乱戦を避ける意図を感じます。」

「あえて集中攻撃を受けやすい外延部に移るとは…よほど艦の性能に自信があるのか？」

「いずれにしてもこの状況を打開するには攻撃を中止するわけにはいかな。」

ローゼンベルグの決意はあくまで堅いようであった。

ここへ来て、ヘルシングもその歩みを止める愚を冒そうとはしなかつた。

「……そうですね。これより突入攻撃に入る！全艦、浮上地点設定！敵旗艦左舷後方に浮上の後、砲撃戦を行う！」

更にヘルシングの手は艦内通信へ伸びる。

「砲術長、主砲弾装填！弾種、鉄鋼弾！」

『了解。1、2、3番砲塔、鉄鋼弾装填！』

潜水艦の兵器管制とは別系統の艦砲を統括するためにゼーレーヴェ級潜水戦艦には水上戦闘用の砲戦艦橋が設けられていた。

この施設は海上へ出た際、索敵、戦闘の中枢となる。

「提督、自分は砲戦艦橋に上がります。」

「うむ。艦隊を任せるぞ。艦長。」

「はっ！」

敬礼とともにヘルシングは海上の陣頭へと向かった。

水上戦に移行したときには艦隊の指揮は中央指揮所よりも現状の

把握が容易な砲戦艦橋が優先される。

そのシステムの巨大さゆえの水上艦と水中艦の完全な融合を果たせなかった結果である。

帝国軍特別水中打撃艦隊旗艦潜水戦艦「ゼー・シユランゲ」砲戦艦橋

そこは潜水艦のそれよりは明らかに水上戦闘艦の艦橋と形容するほうが適切であった。

未だに水中にありながら、艦橋の各壁面は膨大な戦術情報で埋め尽くされており、艦橋内は比較的明るかった。

「艦長、砲戦艦橋に上がられます！」

ヘルシング艦長は足早に艦橋に上がってきた。

砲術長以下、水上戦管制の乗組員たちが出迎える。

「各兵装の準備状況は？」

おもむろに砲術長に尋ねる。

「万端です。主砲、副砲、各銃座とも配置についており、初弾は装填済みです。」

「よしっ……。敵旗艦は主砲の斉射で。周辺の護衛艦は副砲、銃座で殲滅する！」

いまや海面の脅威に向かって潜水艦隊はその全速でもって驍進していた。

それは暴走とも取れる程に力強く、しかし致命的になりかねない不確定要素を含んだ賭けだった。

それを肉眼で捉える者がいれば、その姿に溢れ出しそうな不安と恐怖を必死に押しとどめている人間の覚悟を見て取ったかもしれない。

「敵旗艦と距離5000の地点で深度100を維持、最終確認後に急速浮上を行う。」

「現在敵旗艦との距離、水平面にして8000！まもなく最終待機深度です！」

冷静という意味では、兵士たち下級乗組員の方が落ち着いているといえるだろう。

彼らに出来るのは目の前の作業を的確に遂行することのみだった。それが戦局全体にそのような意味を持つのかと考えることよりも、いかに円滑に戦力となるハードウェアとしての兵器を作動させるかが、彼らが現在果たすべき唯一にして最大の任務であったからだ。

悩むのは考える余裕のあるものに与えられた特権なのである。

第10話 決意の暴走へスタンピード（後書き）

『俺にとって祖国は全てだった。』

その祖国のためなら俺は喜んで銃を取り、死んでやろうと誓った。しかし、俺にとっての祖国って、今はどこなんだ？』

『鋼鉄の海龍同志は激しくかみ合う！』

その砲火が止んだとき、互いの兵の胸に去来する想いとは。くず折れるひざは燃え尽きた栄光か、驕りの代償か。』

『次回、鋼鉄の暴虐、第11話「兵の涙」。

』歴史の軋みが、また一つ。』

なぐんて（笑）。

ご感想、ご意見、アドバイス、苦情なんでもお待ちしております。よろしく願います！

第11話 海蛇は潜らず(前書き)

あんち大鑑巨砲な一節かも!?

第11話 海蛇は潜らず

11 海蛇は潜らず

海上・第二航空機動艦隊輪形陣外延部 航空戦艦「但馬」司令艦橋

海中と同様、海上の艦隊も迎撃の準備を整えつつあった。

航空戦艦「但馬」はいまやその巨体を第一航空機動艦隊の輪形陣の外延部に進め、その前後を「五龍」級防空巡洋艦3隻が固めて、小さな戦隊を形成していた。

輪形陣を形成する他の艦の乗組員と同様、この小さな戦隊の各員が今にも海中から姿を見せようとする怪鯨に対して、その闘争心と集中力を研ぎ澄ませている。

ボルコフは、自らが腰を預ける艦長席を通して伝わる艦の呼吸を感じながら、自信を持っていた。

それは現状における予断を許さない状況においてもなお、艦隊の秩序を本来のそれと変わらず有している艦隊の能力に裏打ちされていたのである。

この会戦に勝利という終止符という打ち、「大戦」そのものを過去

のものとするにすら彼は疑いを持っていなかった。
眼前の状況を徹底的に分析して疑い、数々の作戦を成功させてきた
戦争の職人。

しかし、最終的な「目標」を目の前にして、未だ彼の目は終焉を感じさせない。

其れは未だ渴きを満たしきっていない理性の中に潜む野獣の物であった。

ボルコフとはそういう男だった。

そして彼が現状においてそれだけの自信を持つにいたる理由。それは彼の中でこれから起こる一幕の「喜劇」に用いる手札が既に「揃っている」からであった。

先ほど、海中から探信音が海中から雑音の一瞬の切れ目から発せられた。其れによって彼等はこちらの布陣を知ったことだろう。

問題はこちらにとってそれらは予想の行動であり、寧ろそうならな
いときの対応の方がむしろ対処に困ることになるのであった。

「ソナー班、音探に反応はあるか」

「探信音の後は再びジャミング発生。水中索敵は未だ不可能です。」

こればかりは敵も用心していた。ジャミングの傘が無くなれば、輪形陣内に切り込んでいる潜水艦隊は対潜兵器の雨に打たれることになる。

「艦長。敵は本当に打って出るでしょうか？」

「今の状況を動かすには、敵さんも先に動かざるを得んはずだ。今彼らの行動が制限されていないのは我々が激しい艦隊運動を始めと

した回避行動を取っていないからだが、我々としては危険を冒してそんなことをする必要も理由もない。」

「こちらが激しく動くことは、逆に相手にとって乱戦に持ち込む好機、と言つことでしょうか？」

「うむ。今でこそわが艦隊は互いを相互援護できるだけの位置関係を常に保持していられるが、艦隊リンクによる回避運動を使つてもそこにはたびたび付け入る隙が生まれやすい。強烈な海上攻撃能力と水中と水上を縦横に行き来する機動力を有する潜水艦隊にとつては御しやすい存在となつてしまつたらうよ。それに……。」

ボルコフはその先を継ぎ足す必要を感じなかった。一連の発言で既に副官は艦隊の意図と行動を察することが出来たことを確認したからだ。

彼らには時間という最大のアドバンテージがあった。

彼らは戦っているこの瞬間にも帝国の最後の希望である南極大陸に輪形陣は迫つていたのである。

むしろ艦隊そのものは現進路を維持、本来潜水艦に対する戦法としては異例の防御陣を設定したのである。すると浮上攻撃を基本とする潜水艦の奇襲攻撃に対する対応力は、各艦の流動的な回避運動のときに比べて高くすることが可能なのである。

(さて 舞台は整つた。仕込みも上々。

問題は幕引きまでこちらのシナリオどおりに進むかだが。)

己の思惑の泡沫を内に秘めたまま、ボルコフはただ瞑目して待っていた。もはや彼には焦る理由は何も無い。

ただ客人をもてなすそのときを待つて。

しかし、かの客人はボルコフを長く待たせはしなかった。

「左舷280に海面の隆起を確認！敵潜水艦浮上します！」

「距離600！至近です！主砲、直射角度を超えています！」

「副砲以下各砲で砲撃戦用意！目標を敵艦に設定！主砲は即発状態で待機せよ！」

待機？

そう、射撃用意ではない。敵前では命取りになりかねない時間の口スを生みかねない行動を、ボルコフは敢えて命じたのである。

「但馬」は、その巨大な砲塔を今や顔を水上に出さんとする「ゼーシュランゲ」に向ける。

やがて、艦隊に奇襲を掛けたときにも増した勢いで、潜水戦艦はその巨体を現した。

海を割って踊り出す様は、一瞬空に向かって突きぬけるようにも見える。

その主砲は、すでに目前の獲物、「但馬」に向けられている。

「ゼーシュランゲ」砲戦艦橋

「とつたぞ！」

傾いた艦体に踏ん張って耐えながら、ヘルシングは今度こそ直撃を確実に出来る位置を確保できたことに一瞬喝采をつぶやく。

敵旗艦の主砲はこちらを指向しているが、発射してこないところを見ると近距離の照準に手を焼いているようだった。

これならば、初撃を一方的に叩き込むことが出来る。

「射撃用意！」

ヘルシングは必中させるために艦首が水平になるのを待つことにした。

振動と共に体が傾斜に踏ん張る必要がなくなりつつあることを感じた。

頃合だった。

「打ち方、は…ぐう!?」
最後まで彼は命令を口に出来なかった。

途端にゼーシュランゲを突き動かされるような振動に見舞われたからである。

「何だ!?何が起こっている!」

目の前のコンソールに腕をついて体を支えつつ、ヘルシングは砲戦艦橋を囲うスクリーンがところどころ瞬いていることに気づいた。

それらは一つ一つはそれほど大きな大きさを持っていなかったが、一つの光が瞬いた箇所を見かけたヘルシングは即座に理解した。

174

焼け爛れたように抉れている。揺れの原因は敵弾の弾着だった。

このときの攻撃は「但馬」の前後を固めるように配置された防空重巡洋艦「乗鞍」、「武尊」、「五龍」、「霧牙」からのものだった。

更に、「但馬」からも無数の副砲、両用砲が連続的な砲火を浴びせてくる。

主砲は全く火を吹こうとはしなかったが…。

直縁の各艦は、対空砲として破壊的な威力を誇る127ミリ連装ガトリング砲を全て水平撃ちにして「ゼーシュランゲ」を猛撃していたのである。

無論、所詮小口径砲では、幾ら束ねようと対46センチ砲防御を固めたゼーシュランゲには決定的な打撃を与えることは出来ない。

しかし、本来成層圏にも到達する高初速弾は確実にその装甲に傷を付けて、衝撃を加えて行ったのである。

そして、最短発射間隔で連射されていた砲弾はその狙いを達成していくことになる。

「右舷、艦橋メインカメラ、破壊されました！」

「対空レーダー、沈黙！各主対空砲もシールド開放不能！」

「2番高角砲、被弾！」

ヘルシングは、小さいが短時間のうちに積み上げられる被害に苛立っていた。

「主砲、発射まだか？」

「センサーの多くが破壊されて目標追尾が出来ません！」

「かまわん！現方位で発射せよ！打ち方、始め！」

「了解！全砲門、斉射！」

今度こそ主砲はその牙をむいた。

全て同じ方向に向けられた9門の大筒から灼熱した火柱が「但馬」に伸びる。

その角度は600メートルに迫った距離では殆ど水平に等しかった。

照準直後に目を潰されたとは言え、同航戦では殆どその誤差は無いものと言ってよかった。

『左舷舷側装甲板に被弾！損害不明、格納庫に被害が出た模様！』
「やはり、無傷とは行かんか…。」
ボルコフの表情は想定していたとはいえ苦かった。

「補修作業急がせろ！左舷残存航空機は、右舷へ誘導！入りきらない分は中央通路に駐機せよ。」
忍野が補修作業を急がせる中、被害報告が届いた。
『左舷に命中弾5。内、2発が格納庫内壁に被害。』と。

ゼーレーヴェが被った被害はセンサーだけではなかったのである。

このとき、3隻の防空巡洋艦からの無数の砲撃は、主砲各部を乱打していたのだ。

精密な精度を要求される戦艦の大口径砲は、小口径とは言え高い運

動エネルギーをもつ高初速弾によって、一部が大きくその砲身を歪めてしまったのである。

しかし、大きく損壊すれば暴発もありえた主砲が発射できたことは帝国軍にとって幸運だったと言えるだろう。

しかし、彼らにはもう二の矢を放つことは出来なかった。

艦橋部の施設を大方破壊し終わった総計216門もの127ミリ砲が、「ゼーシユランゲ」の持つ3基の主砲にその火線を向けたのである。

これによって、殆どの主砲は歪みが発射許容限界を超えて発砲が不可能になった。

しかも、このとき帝国軍は非常に重要な機能を喪失したことに気づいた。

「艦長！艦尾ケーブル区域が被弾！ケーブル断線！無線アンテナも機能しません！後続艦への『コロモラン』システム、応答ありません！」

「まさか！敵がシステムの弱点を知ってるはずが…。」

ヘルシングは絶句する他無かった。

これで彼の艦隊は戦力を失ったに等しかった。しかも全て。

このとき、初撃の際に「但馬」以下3隻は、各々が1隻ずつの敵艦に対して、しかも索敵機器が集中する艦橋部に集中させていた。

何度も言うが、その連射速度は通常の艦砲とは次元が違う。

「但馬」に至っては全長400メートルを超える舷側に並べられた火器を一斉に解き放ったわけで、火力はそれらを大きく上回るものであった。

そしてこのとき、帝国軍の潜水戦艦はその弱点を大きく露呈することになったのである。

本来潜水艦は、水中での水圧や、抵抗に対する為に細かい突起物を極力持たないように設計されている。

特に、わずかな水流の乱れすらも音波探知機が捕らえてしまう近年の海中戦において、細長いアンテナ郡など言語道断である。

ところが「ゼーレーヴェ」級潜水戦艦はそうも言っていられなかった。彼らにとって、いかに海上艦よりも近距離での砲撃戦を想定しているとはいえ、精密な砲撃には、大規模なセンサー郡がどうしても必要だったのである。

これに対して帝国軍技術部は、ブリッジ部分への収納方式という、至極まともな回答を提出して問題を解決することとなる。

ところが、今回はそれが裏目に出た。

取り付けられたセンサーは性能として十分なものを持っていたが、収納式という制約の元に大きな軽量化努力をせざるを得なかったのである。しかも、強い水圧にさらされる潜水艦にとって、幾つもの場に穴が開くことは好ましいことではなく、殆どのセンサーを艦橋の、しかも一部に集中して配置したのである。

結果は、今回のヘルシングの狼狽が物語っていた。殆どのセンサーは、各艦とも一瞬のうちに破壊され、瞬時にその優れた能力を失ったのである。

しかも、このとき重要だったのは、「ゼーレーヴェ」よりも「後続の僚艦」であった。

「データリンクは！こちらからの手動制御は出来ないのか！」

「このシステムは母艦からのデータ通信が断たれた際には無人攻撃

を行うように設定されています。無線による射撃盤の指定も、ジャミングによって妨害されていて、不可能です！」

「ならば急速潜行だ！こちらに攻撃オプションは無い！急げ！」

「ヤ、ヤーヴォール！」

「しかし艦長、それでは僚艦は…。」

「無人艦なんぞと心中するのはごめんだ！」

「ゼーレーヴェ」級の建造は南極基地「ヴァルハラ」で行われた。

帝国が残された力を振り縛るように産み出された海獣は一つの切り札だった。

しかしこの艦には不幸にも、帝国にはより優先順位の高い切り札が存在した。

超兵器「ブラッディカエサル」がそれである。

それでも、何とか本会戦に間に合わせる事が出来たのはその工業力が決して潰えたわけではない事を示していた。

ところが、肝心なところでこの計画は変更を余儀なくされることとなる。

とてもではないが、完成から戦場までの間に乗員の育成期間を得ることが出来なかつたのである。

なけなしの人員をかき集めたが、それでもこのクラスの艦を動かすには人手が足りなかつた。

人員のいない艦艇を運用する唯一の方法、それが「無人艦」として旗艦の指揮下に入る「コロモランシステムであった。

帝国の誇る技術の結果が、今回の敗北の遠因だったのである。

艦のあちこちは傷ついてはいたが、「ゼーシュランゲ」はまだ潜る力を持っていた。

ヘルシングは最後の機会に掛けて乗員を叱咤していた。

「急げ！敵の主砲に討たれたらお終いだ！排水急げ！」

ヘルシングの叱咤は艦も突き動かさなかりだった。

その巨体を震わせるように「ゼーシュランゲ」はうなりと共にその速力を上げていく。

と、突然機関の稼動音が弱まってくる。

巨体も、まるで眠りに落ちるかのようにその唸りを低く、静かなものとしていった。

「どうした！被害報告！」

「大規模な被弾は確認できません！原因不明！」

「そんな馬鹿な！」

ヘルシングには信じられなかった。目の前で起こったことは、まるで冗談のようにしか感じられず、一時の間、彼は砲戦艦橋の指揮パ

ネルの前で立ち尽くした。

そのとき、彼の前にある一つのコンソールに新たな光が宿る。
それは彼の足元、指揮所からの通信だった。

『全乗組員に告ぐ。艦隊司令官のアレクサンドル・フォン・ローゼンベルグ少将である。これより我が艦は、同盟軍第13艦隊群に投降し、以後その指揮下に入る。各員は武装解除の後出迎えの準備をせよ。』

ヘルシングの膝が、重圧から開放され、重力に屈した。

第11話 海蛇は潜らず（後書き）

『静かに会戦の幕を下ろそうとするローゼンベルグ。しかし、忠義は狂気を呼び、悲劇を生み出す。』

『一方、同盟軍の消えた片割れはとうとうその姿を現すが…？』

『次回、鋼鉄の暴虐、第12話「タッチ・アンド・ゴー」

〜歴史の軋みが、また一つ〜』

最近、込み合ってきたこともあり更新が停滞気味になるやも知れませんが。呼んでくださっている方々、ありがとうございます。

今後とも、ご意見、ご感想、アドバイスなんでもお待ちしております。よろしくお願いします。

第12話 終焉へのキャストメイク（前書き）

恐ろしく間が空いてしまいました。

ただ漸く自分の中で線が繋がってきたので書き続けてみたいです。

第12話 終焉へのキャストメイク

12

「どういふことですか！？提督！」

ヘルシングは、発令所に繋がったマイクに向ける自分の声が荒くなることを抑えることが出来なかった。

なんとという屈辱。なんとという無力感。

それを直視することを拒む闘志はその矛先を内に向けるほか無かった。

自分はまだ負けていない。
負けるわけにはいかない。

そんな想いが彼を突き動かしていたわけだから。

『艦長か…。命令は聞こえたはずだな？直ちに信号弾を発射してくれたまえ。』

ローゼンベルグの声はあくまで落ち着いていた。まるで戦いも
う終わったかのように。

それは余計にヘルシングの興奮を加速させただけであったが。

「承服しかねます！まだ我々は負けたわけではありません！なぜこんな所で戦いを終わらせることが出来ましょう！」

ヘルシングのこれまでにない怒号にも似た上申にも、ローゼンベルグの心はいささかの揺れも見せたようには感じられなかった。

『その通り。我々はまだ、戦うことが出来る。だから命令を実行するのだ。』

ヘルシングは訳がわからなかった。

一体、この男は何が言いたいんだ？
提督は気が触れられたか！？

「であるなら、今すぐに潜航して態勢を整え、『潜るな』と言っておるのだっ！…はっ！？」

突然の大声に、ヘルシングは固まるほか無かった。

やがて一瞬静かになった通信画面から搾り出すように声がした。

『命令…なのだよ。陛下からの、最後の…な。』

「なんですって…。」

ローゼンベルグの声は殆ど落ち着いて、しかし確かに震えていた。

そこでヘルシングは気づいてしまった。提督ですら決して望んでの命令ではない。

しかし、決して無視して、我を通すことの出来ない意図を持ったものであることを。

武人とはそうした生き物であった。

「我らに…。陛下は何をせよと申されるのですか。一時とはいえ、帝都を敵に蹂躪されても尚忠義の元に生きる我らに。」

『それも、全て話そう。艦長。発令所に戻りたまえ。』

ヘルシングは自分の足元が大きく揺らぐのを感じた。しかし、それは彼が心と共に立つ足を萎えさせたからではない。

気づけば周囲から押し寄せていた着弾の雨は止んでいる。

彼は自分の足元をじっと見つめた。

確かに立って、生きている。

ヘルシングは踵を返すと来たときと同様、足早に砲戦艦橋を後にした。

死んで行った者たちのためにも、まだ全てを投げ捨てるには早すぎるのである。

海上では。

巨大な海獣はその足を止めていた。

次第に敵艦隊の輪形陣から離れていく中、周囲を先ほど大量の砲火を浴びせた巡洋艦や戦艦が、そしてそれらに呼ばれた駆逐艦が取り囲み始める。

しかし、そこに砲火は無い。

とどろく砲声も無い。

ただ大きくうねる沖合いの灰色の波と、船の心臓部の響きが支配していた。

双方に頂点を迎え損ねたように、闘いは突然にして止まる。この異様な休戦が、そのままこの一角の闘いを締めくくるのか。また、地獄のフィナーレに向けた幕までしかないのか。

知らない彼らは互いの牙を向け合ったままであった。

「敵艦隊、行き脚止まりました。単縦陣のまま並進、減速中です。」

航空戦艦「但馬」司令艦橋

「まだ降伏勧告も一度目ですが、諦めがちと良すぎる気がしませんか。」

忍野はあまりにもあっさりした結末に懸念を示さずにいられたかった。

対するボルコフの目は、早くも冷めている。既に目に宿る凶器ともとれる光を消して、灰色の海原に目を向けている。

「闘いにならんか…。」

「艦長…。お気持ちは察しますが、そうあからさまに失望したような表情をせんで下さい。我々はたいした損害もなく初戦を制して、目標に向かい続けていられるのですから。」

傍らの上官が、余りにも露骨に現したように思えて、副官は少し鼻白んだ。

「忍野君。私はそのことに失望している訳ではないよ。」

「は？」

忍野はらしからぬ上官の答えに、ボルコフの顔を覗き込んでしまった。そして彼が既にその表情を苦々しげに歪めていることを見て取ってしまった。

「仕組まれた盤上で踊る駒なんぞ、気分のいいものではない。台本を渡されてすらおらんのだから、尚更だ。」

「仕組まれた…？何の話でありますか？」

突然の上官の独白は、実のところいつも彼を困惑させていたから珍しいことではなかった。副官のこの問いさえ、彼らの間では日常的なやり取りだったりする。

「考えても見たまえ。いくら主砲を潰されたといっても奴さんは潜水艦だ。潜ればいくらでも戦いようはある。それを自ら、しかもこの早すぎるタイミングで放棄したのだ。不自然も極まりないとは

「思わんか？」

「しかし、予定されていた投降にしてはそれこそ不自然ではありませんか。彼らにそのタイミングはいつでもあつたはずですよ。それを損害を負つた上での投降など、無駄に義性を出すだけではありませんか。」

それなりに的を射ているはずの忍野の意見に、ボルコフは深いため息に、落胆と楽しみを器用に織り交ぜて吐き出した。

「忍野君……。キミにはもっと俯瞰した見方をして欲しいものだな。この場合、相手が二つ以上いるということをお忘れてはいかんよ？」

「敵と…味方。いやそればかりではありませんな。帝国王室と同盟中央政府、更に…。」

「我々だよ…。この一連の戦いが誰のためのショーであつて、最後に舞台上にあるのは誰なのか。その結末が決まっているとしたら…果たして君は機嫌よくいられるかね？」

「自分は、用兵家とは、闘いを始める前に見通しをつけるものと、以前閣下から伺つた覚えがあるのですが？」

「そうだ。これが本当に闘いだつたらな。茶番だと言つたらうが？」

「…にしても。だとしたらその不愉快な脚本家は誰だとお考えなのですか？まさか、帝国ではありませんまい。」

「…決まっておろう。」「
闘将は深いため息で返した。

一方、隣に漂う、正反対の立場にある艦でも、奇しくも同じ議題が上っていた。

電子機器で埋め尽くされた発令所には、薄暗くはあっても暗黒の支配する部分は少なかった。

それでも、ヘルシングは見つめているはずのローゼンベルグの顔を全く見ることができなかった。

「…茶番ですと？この世界で最も重大な戦いですか。」「

ヘルシングの声は、極度の怒りと困惑によって、興奮を通り過ぎて沈着なものとなっていた。己の殆ど全力で冷静さを維持しようとしていた結果である。

「我々にとっては余りに恐ろしい皮肉だな…。」「

ローゼンベルグは、先ほど見せた一瞬の興奮は遠い彼方に起こったかのように冷静な目をヘルシングに向けている。それは、品定めをするかのような、観察する者が見せるソレに似ていた。

「提督：先ほど仰られていた言葉の意味、教えていただけますか？それ次第では、小官は…冷静な判断を下せる自信が、ありません。」

搾り出された声には抑揚が無く、妙にたどたどしく聞こえた。目にも見えてヘルシングが焼ききれそうになっているのは目に見えていた。

「では、これを読みたまえ。全てが記載されている。少なくとも今君が知りたいことはな…。」

それは、見た目にもよく判る上質な羊皮紙によって作られた封筒だった。

ヘルシングはその只ならぬ風体の紙切れに、一瞬怯み、それによって冷静さを回復指せた。受け取ると、まるでソレ自体がメッセージであるようにまじまじと見つめてからひっくり返す。

封印は既に切られていたが、その切れ目が入った紋章から明らかに帝国の、それも最高級に位置する皇帝一族によるものであることが見て取れた。

最後にこの紋章を見たのは、帝都から逃れて、南極に無事に皇族

を送り届けた時にいただいた手紙以来である。

中にあるのは、やはり羊皮紙で、以前にも見られた筆跡が踊っていた。

むさぼるように読み始めたヘルシングを、ローゼンベルグはじっと見守っていた。

そして、視線とは裏腹に、彼は肘掛に置かれた右手、そして右太ももに感じられる重さの主に集中させて時が動くのをじっと待っていた。

発令所の中を、沈黙したレーダーの警告音、敵艦を捕らえていることを懸命に知らせようとするソナー、そしてじつと二人の挙動を見守る乗組員の息遣いが満たした。

それは、潜航中の緊張感ともまた違う。内なる一点に注がれる張り詰めた緊張感だった。

やがて、ヘルシングの腕がゆっくりと降り始めた。
そして羊皮紙から離れたヘルシングの視線が再びローゼンベルグと向き合う。

「」
「」
「」

二人の間では何も動かない。

「」（パリッ。）
「！。。」

僅かな音と共に、紙が二つに折られた。

そして、静かに折りたたまれたそれは再び封筒に納められ、目の前の人物に差し出される。

ローゼンベルグはなおも視線を外さず。ゆっくりそれを受け取った。

ヘルシングの腕が上る。ローゼンベルグは静かにそれを見ていた。次に目の前の男が手を止めるとき、この場は狂気とカオスの支配する場となるかもしれないのだ。ローゼンベルグは掌が厚い皮手袋の中で汗ばむのを感じて、必死に肘掛けの腕を動かすまいとした。目の前の男を信じたいから。

「…謹んで、御命令を承ります。」

まっすぐと上官に向けられたヘルシングの敬礼は、発令所の緊張を異質な物へと変えて行った。

「我らの闘いは、まだ終わっておりませぬ。世界帝国の戦士として、任務を全うします。」

「…ありがとう。同志よ。」

ローゼンベルグは汗が急速に冷えて行くのをかんじながら、気分が悪いとは思わなかった。

間違いなく、目の前の男から新たな光を見て取ったのだから。

「通信士！右舷の同盟軍戦艦と交信の用意を。航海班は僚艦の再集結のためにコントロールを復旧せよ！」

「ヤーヴォール！！」

途端に発令所の中が慌ただしくなり、永遠とも思える停滞は霧散した。

ローゼンベルグは、ゆっくりとその様を見回して、指示を出し続ける漢に声を掛けた。

「ヘルシング艦長。」

「はっ。」

「只今より5分後、15分間に渡って前甲板を立ち入り禁止とする。」

「！…了解。」

「尚、不測の事態に対しては我が軍法規、艦隊条例に従って行動せよ。詳細は、私の部屋の机にある。」

使うことの無かったことに感謝しながら、ローゼンベルグはその手に力を込めて立ち上がった。

重さを感じるようになって久しかったが、このときばかりはそれを堪能したかった。

司令官席を離れ、背後の水密扉に近づく間、発令所に誰一人手を止める者はいなかった。止めればきつと振り向いてしまう自分を、みな必死に抑えているのだ。

「提督！！」

ヘルシングがついに耐えきれずに振り向いたとき、ローゼンベルグは丁度水密扉に手をかけた所だった。

言葉に対してその男は、また静かに敬礼を返した。

「…諸君の武運を、祈る。」

ヘルシングは今までに無いほどの敬礼をして、軍靴を合わせた音が

一つでないことに気づいた。

ローゼンベルグは発令所にいる全員からの敬意を有り難く受け取った。

彼らの姿勢は水密扉がその封印を取り戻しても崩れることはなかった。

第12話 終焉へのキャストメイク（後書き）

以前より少ないですが、区切りをつける為にここで一息着きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2405e/>

鋼鉄の暴虐～パラサイトフリート～

2010年10月16日15時06分発行